
とある賢妹愚兄の物語

夜草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある賢妹愚兄の物語

【Nコード】

N4663Z

【作者名】

夜草

【あらすじ】

もしも、とある魔術の禁書目録の主人公である上条当麻に妹がいたとしたら。しかも、その妹は常盤台中学に在籍するほどの優等生で、あの常盤台のエースである御坂美琴の姉貴分。しかし、兄の当麻をどうしようもないほど異性として見るほどの重度のブラコンだとしたらを想像して書いたとあるシリーズの再構成物語。投稿が初めてなので、更新も遅く、駄文だと思いますが、温かい目で見守っていただきたいです。変な個所をご指摘いただけると勉強になりますので嬉しいです。

設定資料（前書き）

初めての投稿なので、温かく見守ってください。

設定資料

設定資料

かみじょう
上条 詩歌

常盤台中学3年生の女子生徒。上条当麻の妹。当麻を追って、学園都市に来た。元々ブラコンだったが、幼いころに変質者に刺されそうになったところを当麻に助けられて以来、重度のブラコンになり、将来はお嫁さんになると決意する。兄のことなら何でも知っていると言語している。兄である当麻を一人の異性として見ているため、両親の頭を悩ませている。しかし、鉄壁の猫かぶりのため、当麻を除いた親しい者以外にブラコンだと知る者はいない。兄の理想なお嫁さんになるため家事一（花嫁修業として）、学業一（成績が悪い兄の教師をするため）、人間関係一（兄を疫病神扱いさせないため）を幼いころから頑張った結果、常盤台のお嫁さんにしたい女の子第一位に輝き、いろんな男性から告白されている。また、兄が頻繁にトラブルに巻き込まれるため、常盤台に入ってから寮監に格闘技術を教わった。そのため、格闘能力は非常に高い。人にものを教えるのが好きで将来は教師になりたいと考えている。

兄である当麻に異性とみられたいため、一日おきに一（当麻に毎日とは勘弁してくれと頼まれた）兄の部屋に通っており、掃除、洗濯、料理をしている。過去に掃除をしたときにエロ本を発掘し、兄の目の前で全てを朗読して燃やした一（妹もののエロ本がなかったため）。それがトラウマになり、当麻はそれ以降エロ本を買ってない。また、兄に三日も合わないと言精神が不安定になる一（兄成分が補充できないため）。学園都市に行くまでは毎日当麻にメールをしていた。当麻が女性とラッキーイベントになるたびにキレ、母と同じように近くにあるものを投げる。時々、同士である舞夏のアドバイスに従

って色仕掛けをするが、当麻には全く効いていない。本当は兄と同じ中学に通いたかったが、禁断の関係になるのを恐れた親が強制的に常盤台に通わされた。そのため、高校は絶対に当麻と同じ高校に通うことを決めている。

顔は母である詩菜に似ていて、髪型はロングで腰のあたりで髪飾り一（当麻がくれた）で一つにまとめている。兄の好みのタイプになるために毎日豊胸トレーニングを欠かさず、ムサシノ牛乳を飲み続けた。その結果、胸は吹寄クラスになったが身長は美琴と同じ程度。御坂美琴とは姉妹のような関係で自身の能力でLevel5になるまで能力開発に協力した。そのおかげで、美琴は詩歌に顔が上がらない。詩歌が当麻に女性の知り合いを紹介したがらなかったため、本編開始まで美琴と当麻はお互いの存在を知らなかった。

学校を問わず様々な人の悩みの相談に乗り、導いていることから微笑みの聖母と呼ばれている。しかし、不良達からは、どんな能力者も狂わせ、拳一つで相手を倒すことから狂乱の魔女と呼ばれている。

陽菜は学園都市に来てから出会った親友で自身の能力を知る要因でもある。陽菜の〈発火能力〉の能力開発に協力するかわりに自身の能力を隠すのに協力してもらっている。

原石であり、能力は〈イマジントレースー（幻想投影）〉。相手もしくは能力そのものに触れることで相手の能力を理解し、一度だけ30分程度使うことができる。原石でLevelはコピーした相手とまったく同じである一（コピーしてなければLevel10）。コピーは1つのみしかできず、ストックは半日しかできない。また、道具が必要な場合は道具がなければ使うことができない。魔術もコピーすることができ、拒絶反応しないで魔術を使うことができる。聖人の特性すらもコピーすることができる。AIM拡散力場さえも同じになるためコピーした相手と同調することができ、相手の力のブースターになったり、干渉することもできる。詩歌は自身の指導力の高さとの力で様々な能力者を開花させてきた。原石で珍しい

能力だがあまり騒ぎにしたくない（当麻との時間が減らしたくない）ため、身体検査では陽菜に協力してもらってLevel3の<発火操作>であることにしている。

人間関係

・ 上条当麻：兄。理想の異性。幼いころ自分を庇って怪我したため負い目を感じている。

呼び方『当麻さん』呼ばれ方『詩歌』

・ 上条刀夜：父。浮気性の駄目な大人だと思っている。兄の反面教師にしている。

呼び方『父さん』呼ばれ方『詩歌』

・ 上条詩菜：母。家事の師匠で兄と結ばれるための最後の難関。

呼び方『母さん』呼ばれ方『詩歌さん』

・ 御坂美琴：妹分。当麻が学園都市に行ってから知り合った。能力開発に協力した相手の一人。

呼び方『美琴さん』呼ばれ方『詩歌さん』

・ 土御門舞夏：同士。将来の目標。

呼び方『舞夏さん』呼ばれ方『詩歌』

・ 寮監：武道の師匠で恋の相談相手。

呼び方『師匠』呼ばれ方『詩歌』

・ 白井黒子：後輩。入寮時に鉄拳制裁でルールを叩き込んだ。

呼び方『黒子さん』呼ばれ方『詩歌先輩』

・ 鬼塚陽菜：学園都市に来てから知り合った親友でルームメイト。

能力開発に協力した相手の一人。

呼び方『陽菜さん』呼ばれ方『詩歌っち』

鬼塚 陽菜

常盤台中学3年の女子生徒。詩歌の親友でルームメイト。詩歌の能力を知る数少ない者の一人で重度のブラコンであることも知っている詩歌のよき理解者。関東で有力の鬼塚組の一人娘でもあり、詩

歌とタメを張れるくらい喧嘩が強い。最初はLevel10だったが詩歌との特訓により今ではLevel4までになった。そのことをかなり感謝している。学業の成績が悪く、テスト前には詩歌に教えを乞っている。

髪は赤色のポニーテイル。身長は当麻と同じくらいだが、胸は無い。顔も凜々しいため、男装させても違和感がない。

過去に詩歌と共に鬼塚組が関与したスキルアウトの抗争を阻止したことがあり、それ以降、スキルアウトからは赤鬼と呼ばれている。能力は発火操作のLevel4。<鬼火>と呼ばれている。視界の範囲ならどこにでも炎を発生させることができ、半径10mの範囲なら熱探知が可能。

かみじょう
上条 当麻

高校一年の男子生徒。詩歌という妹がいるためか原作よりも頭が多少良く、喧嘩も強くなっている。さらに制裁を受けているため耐久力が半端ない。

詩歌の決意

詩歌の決意

詩歌 side 上条家

今日、お兄ちゃんが私を庇って刺された。

どうやらお兄ちゃんのことを自分を不幸に追い込んだ疫病神だと思
い込んだ人がお兄ちゃんを襲うために、私たちの家の近くまで来た
らしい。

そのとき、たまたま一緒に遊んでいた私を人質にしようとしたとこ
ろをお兄ちゃんが立ち向かい、私を守って刺されてしまった。

幸い、巡回中の警官により、犯人は逮捕され、お兄ちゃんはすぐに
病院に運ばれ無事に助かった。

私はずっと泣き続け、そのうち疲れて寝てしまったらしい。

目が覚めると父さんと母さんが口論していた。

刀夜「母さん、当麻を学園都市に送ろうと思うんだが」

詩菜「なに言っているんですか、刀夜さん！？当麻はまだ幼稚園を

卒業したばかりですよ！そんな当麻を一人にさせてしまつつもりですか！？」

刀夜「でもな、母さん。もし当麻をこのままここに居させたら、いつか周りの人たちが騒ぎ立てる迷信に当麻が殺されてしまつかもしないんだ…。だからこそ、当麻を疫病神扱いすることよりも、そんな迷信がない学園都市に送ってやった方が、当麻は幸せになれると思うんだ」

詩菜「そ、それは…。もし…学園都市でも当麻が疫病神扱いにされたらどうするんですか！？親元を離れた当麻は一人でそれに耐えなきゃいけないですよ！」

刀夜「それでも、いきなり見ず知らずの人が襲ってくるここよりはましだろう。今日は助かったが次は死ぬかもしれない…」

詩菜「……………そうですね…ここにいるよりは安全ですね…」

いつもは平行線をたどるのだが、今回でどうやら母さんが折れたようだった。

それを聞いた詩歌の幼い顔が悲しみに歪む。

詩歌「お兄ちゃん…一人でどこか行っちゃうの？」

その質問で私が起きたことに気づいた父さんと母さんが私の質問に答えてくれた。

詩菜「そうよ…当麻は学園都市というところに行くのよ…。当麻とはしばらく会えなくなるわ」

詩歌「やだやだやだやだー！お兄ちゃんと会えなくなるなんていやだー！！」

刀夜「わがママを言うなっ、詩歌！当麻が今日みたいに怪我をしてもいいのか！！？」

初めて私に父さんが怒鳴った。

その迫力にはまた泣きそうになる。

詩歌「うう…」

詩菜「刀夜さん、言い過ぎですよ。詩歌が泣いちゃいますよ」

詩歌「ううん、詩歌は泣かないもん！父さんなんか泣かされないもん！」

そう言って、近くに会ったティッシュ箱を父さんに投げた。

刀夜「ご、ごめんな、詩歌。怒鳴ったりして。…でもな、当麻が向こうに行くのは納得してくれないか？詩歌だって、当麻が傷つくのは嫌だろ？」

詩歌「うううううう。なら詩歌も学園都市に行く！」

刀夜「だめだ！まだ小学生にもなってない詩歌を送るなんて絶対にだめだ！！」

再び、父さんが怒鳴ったことで泣きそうになる。

詩歌「ううう。だって、詩歌、将来はお兄ちゃんのお嫁さんになるんだもん！だから、お兄ちゃんと離れたくない」

しかし、私は涙を堪えて、父さんに言い返した。

詩菜「刀夜さん、詩歌も落ち着きなさい…。詩歌、今の詩歌が学園都市に行っても当麻の役には立たないわよ。一人で満足に家事ができないじゃない。そんなんじゃ、向こうに行っても当麻の足を引張るだけですよ」

詩歌「…わかった。なら！一人でも家事ができるようになったら向こうに行ってもいい？」

刀夜「だめだ！こんなにかわいい娘の詩歌を学園都市で一人暮らしなんてさせたくない！お父さん、泣いちゃうぞ！最近じゃ一緒にお風呂にも入ってくれなくなっ
」

母さんが無言で皿を投げた。

父さんの頭に見事命中し、黙らせることに成功した。

頭から血が出ているが問題はないだろう。

詩菜「ふう…、わかったわ。詩歌がきつちり家事ができるようになつたら学園都市に行くことを許可します。ただし、この一年間はお母さんの言うことを聞くこと、いいわね？」

詩歌「うん！わかった！母さんの言うことばつちり聞く！」

詩菜「ふふふ、本当に詩歌は当麻のことが大好きね」

詩歌「うん！お兄ちゃんのことだいすきー！今日、お兄ちゃんのお嫁さんになるって決めたんだー」

詩菜「そう、じゃあ、明日からは家事の手伝いをするときは先生っ

てよぶこと、いいわね?」

詩歌「うん、わかった!先生、よろしくお願いします」

詩葉「ふふふ、もう気が早いわよ、詩歌」

私はこの日、お兄ちゃんのお嫁さんになるため頑張ることを決意した。

刀夜「誰も私の心配をしてくれないのか。うううう」

部屋の隅で父さんが泣いていた。

詩歌「父さん、怒鳴ったから嫌い!だから知らない!」

刀夜「そんな!去年までは父さんのお嫁さんになるって言うてくれたのに……。そうだ、今度父さんがデパートに連れてって何でも好きなもの買ってあげちゃうぞ。レストランで詩歌が好きなハンバーグも「刀夜さん……」」

母さんが父さんのことを屠殺場に連れてかれる豚を見るような冷たい目で見ている。

その迫力に父さんは思わず後ろに下がった。

母さんは、良く通るのに何故か唇が全く動かない話し方で

詩菜「もう、刀夜さんったら実の娘に対してもそうなのかしら。この前買ったばかりの最新式のDVDデッキを投げつけて欲しいのかしら。本当に困ったわ、せっかく買ったばかりなのにまた買い直さなきゃいけないなんて。しばらく、刀夜さんのお小遣いはなしかしら？」

刀夜「い、いや母さん落ち着いて。その手に持った物を降ろしても、もう、すみませんでした本当に申し訳ございませんでした！」

父さんが一瞬で母さんに土下座をする。

その光景を見て、私は母さんには絶対に逆らわないことを誓った。

一年後

あの日、兄さんのお嫁さんになることを決意した日から一年がたった。

本当に長かった。

こんなにも長い間兄さんと会わないのはきつとこれからはないだろう。

この一年は毎日連絡したから耐えられたけどもつこれ以上は耐えられないだろう。

詩歌（もう絶対に兄さん、いや、当麻さんから離れるもんか）

？「詩歌ちゃん、学園都市に行っちゃうの？」

私があのとときの決意を新たにしていると、この一年で妹分になった御坂美琴さんが話しかけてきた。

詩歌「うん、そつだよ、美琴さん。今日、私は学園都市に行くんだよ」

美琴さんが泣きそつになり、出発の決意が揺らぎそつになる。

美琴「ううう」

そのとき彼女によく似た女性が美琴さんを抱きしめた。

美鈴「ほら、泣かないの、美琴ちゃん。今日は泣かないで笑って見送るって決めてたでしょ」

この人は美琴さんのお母さんの御坂美鈴さん。

美琴さんのお父さんには会ったことはないが、御坂家とはこの一年で家族ぐるみで仲良くなった。

美鈴さんの言葉で美琴さんは少しぎこちないが私に笑顔を向けてくれた。

美琴「うん、わかった。詩歌ちゃん、向こうでも頑張ってるね。私も来年行くからね！」

美鈴「来年は美琴のことよろしくね、詩歌ちゃん」

詩歌「はい、おまかせください、美鈴さん」

美琴さんと美鈴さんと話していたら、出発の準備が終わったのか父さんと母さんが呼びに来た。

刀夜「詩歌、出発するぞ。別れの挨拶は済ませたか？」

詩歌「はい、今行きます、父さん、母さん。それじゃ、また来年ね、美琴さん」

美琴「うん！また来年」

美鈴「またいつか会いましょうね、詩歌ちゃん」

詩菜「詩歌の見送りありがとうございます。それではもう行きますので」

私は車に乗り込んだ。

刀夜「それじゃ、出発するぞ」

父さんが車を走らせる。

後ろを見ると美琴さんが泣いていた。

一年前の私のように

詩歌「また来年ね、美琴さん」

御坂家と別れを済ました私は当麻さんがいる学園都市へ向う。

詩歌（今行きます、当麻さん。待っててくださいね）

S i d e o u t

刀夜 s i d e 道中

私は去年のこの日、息子の当麻を学園都市へと送った。

当麻がここにいたら周りが言う“不幸”に殺されてしまつかもしれないからだ。

向こうでも当麻の不幸はなくならなかったが、ここみたいに疫病神みたいな扱いははされなくなったらしい。

どうやら学園都市に送った私の判断は間違いではなかったらしい。

そして、その日から娘の詩歌は変わった。

詩歌は毎日母さんの家事を手伝いながら、家事の勉強をし、幼稚園児ながら小学生の問題の勉強をしているらしい。

母さんがやることをスポンジが水を吸うように覚えていき、

勉強の方も今では中学生の問題も解けるらしい。

友達作りも怠らず、友達もどんどん増やしていった。

今では妹分の美琴ちゃんがいるくらいだ。

しかし、そのすべてが実の兄である当麻のお嫁さんになるためだからだと考えると何にも言えなくなる。

家事は将来当麻を支えるため、

勉強は当麻に勉強を教えるため、

友達作りは当麻を疫病神扱いさせないためだ。

そう、全ては当麻のために…

一体どこで道を間違ったのか…

最近では言葉遣いだけでなく、雰囲気も母さんに似てきたし…

この前、うっかり女性を接触したときの私を見たあの目は母さんにそっくりだった。

何故か当麻のことが心配になってきた。

このままでは当麻と詩歌が禁断の関係になってしまうかもしれない。

そう思った私は母さんにこのことを話してみる。

刀夜「なあ、母さん。詩歌はまさか当麻のお嫁さんになったりしないよな？」

詩菜「うーん、当麻さんは詩歌のことをかわいい妹としかみてないし、刀夜さんが心配することはないでしょう」

刀夜「そうだよな！当麻が詩歌のことをお嫁さんにするはずがないよな！いやー、去年からの詩歌を見ていたらもしかしてそうなるかもって考えてたんだ！いやーよかった！」

私はその答えにホツとした。

が

詩菜「でも、詩歌のあの調子が続いたらそうなるかも知れません。…何か手を打たないといけませんね。刀夜さん、家に帰ったらこのことについて考えましょう」

刀夜「ははは、母さん、大丈夫だって。当麻だって実の妹を異性として見るはずがないさ」

詩菜「刀夜さん。…恋する女の子は不可能を可能にしますよ。当麻さんにその気がなくても詩歌さんならどうにかしてしまつかもしれません」

私は詩歌を学園都市に送ったことが間違ってしまったたかも知れない…

当麻、頼むから早まるなよ！

へっへっ

詩歌の一日

詩歌の一日

詩歌 side 当麻の部屋

学園都市に来てから9年が経ちました。

私は今、当麻さんの部屋で朝食と昼食の弁当の準備をし、洗濯物を干し、ワイシャツにアイロンをかけ、当麻さんの学校へ行く支度をしています。

家事をしながらふと今までのことを思い出しました。

あれから当麻さんと同じ小学校に通い、公私にわたって当麻さんのことを支え続けてきました。

中学校も同じところにいき、当麻さんを支えていこうとしましたが、母さんがかわいい妹分の美琴さんを抱き込み、私に常盤台中学に通うよう説得させてきました。

結局、かわいい妹分の美琴さんの頼みを断ることができず、母さんの策略通りに常盤台中学に入学することになり、寮に入れられてしまいました。

常盤台中学でレベルの高い授業だけでなく様々な事を学ぶことがで

きましたし、寮監、いえ、師匠からは高位能力者ですら倒せる格闘技術を学べました。

今では親友の鬼塚陽菜さんと互角に戦えるくらいです。

しかし、当麻さん分の補給が困難になり、危うく生活ができなくなりそうでした。

それだけでなく、監視も緩んでしまったせいか、当麻さんは大量のいががわしい本を所持していましたし…

当麻さんは友人のものだと言っていましたので見逃そうと思いましたが、妹もの本がなかったため、容赦なく全てを朗読し燃やしてしまいました。

ふふふ

そのおかげで、誰も当麻さんに本を貸さなくなり、本人も購入する気もなくなったらしいのでよかったです。

それに当麻さんの好みもわかりましたしね。

今は当麻さんの好みのタイプ、寮の管理人のお姉さんになるために頑張っています。

しかし、胸は大きくなりましたが背がなかなか高くなりません。

これはあの怪しい通販を買うべきでしょうか？

悩むところです。

それにしてもアピールしているのですが当麻さんはなかなか振り向いてはくれません。

同士であり、目標である土御門舞夏さんのアドバイス通りにしているのですが、その鉄壁の鈍感さによってこちらの好意になかなか気づいてもらえません。

まあ、その鈍感のおかげで当麻さんを狙う数多くの女性を退けることができたのですが…

まったく当麻さんは魅力的すぎるので好かれるのは仕方ないと思いますがね。

なので、好みのタイプとは離れていますますが美琴さんを当麻さんに会わせないようにはしています。

もし美琴さんが当麻さんのことを好きになってしまったら、ライブルになってしまいますしね。

そのときは……うふふ

私がそんな心配ごとをしていると当麻さんが目覚めたみたいです。

S i d e o u t

当麻 s i d e 当麻の部屋

目が覚めるとおいしそうな匂いが漂っていた。

おそらく、妹の詩歌が朝食を作ったのだろう。

それだけでなく弁当、洗濯、アイロンがけ、出かける支度もしてくれている。

まったくよくできた妹である。

背は小さいがスタイルもいいし、あの常盤台中学に通っているのだから多くの男性に好かれているだろう。

しかし、当の本人は今まで告白を受けたことがないらしい。

なので、この前もしかして好きな人がいるのかと思い、相談に乗ろうとしたら、腹に重く突き抜けるような一撃を貰った。

おかげでしばらく呼吸が止まり、意識を失いかけた。

すぐに謝ってくれたが、そのときの詩歌の暗く輝く目を見て、もう2度とこのことは聞かないと心に誓った。

あれには殺意が込められていたと思う……

そのときのことを思い出していると詩歌が挨拶をしてきた。

詩歌「おはようございます、当麻さん。あと少しで朝食ができますのでもうしばらくお待ちください」

当麻「ああ、おはよう、詩歌。今日もありがとな、わざわざここまでしてくれてここまでくるのは大変だったろう」

詩歌「いえ、私が好きでやっていることですから。本当は毎日通いたいのですが」

当麻「それはダメですよ。そんなことしたら、当麻さんは妹がいないと生活できないダメ人間になってしまいますよ」

詩歌「そうなら嬉しいのですが…」

当麻「ん？なにか言ったか？」

詩歌「いえ、なにも。そこに今日の制服が掛けてありますので着替えてくださいね」

当麻「おう」

詩歌が朝食の準備に戻り、制服に着替えようとしたときふと視線を感じた。

当麻「（ん？またか…詩歌が朝来た日にいつも感じるんだよな。な

んだろ？)

そうして着替え終わると、まるでタイミングをはかったみたいに詩歌が朝食を持ってきた。

詩歌「当麻さん、おまたせしました。ん？どうしましたか？」

当麻（まさか、詩歌が？）

当麻「いや…。詩歌は今まで向こうにいたんだよな？」

詩歌「ええ、そうですけど。朝食の準備をしていましたが…。どうかしたんですか？」

その目からまったく動揺は感じ取れない。

当麻「いや、なんでもない。それじゃ、早く朝食を食べよう」

当麻（詩歌が覗きなんてするはずがないよな。はは、気のせい、気のせい）

詩歌「ふふふ、変な当麻さん」

ギリッ

一瞬、詩歌の目が襲いかかる寸前の野獣の目に見えたような気がした。

気のせいだろう、気のせいですね、気のせいに違いない！

これ以上追及してはいけないと勘が告げている。

疑念が残ったが、とりあえず、朝食を食べることにする。

S i d e o u t

詩歌 s i d e 詩歌の教室

ふうー、今日の当麻さん分を補給することができました。

覗きは危うくばれそうでしたけどね。

にしても、当麻さん。ますます身体が引き締まっていました。

おかげで目の保養になりましたが、異性に好かれてしまわないか少し心配です。

これは悪い虫がつかないように監視を強める必要があるかも知れません。

まったく本当に当麻さんは世話がかかりますね。

そうして無事今日の授業が終わり、当麻さんの高校に行こうとしたとき、私の親友の陽菜さんが声をかけてきた。

陽菜「詩歌っち、今日暇？暇なら今日買い物に行こうよ」

詩歌「ごめんなさい、陽菜さん。今日は当麻さんの高校に行かなければならないの」

陽菜「あはは、そうかそうか。それなら仕方ないね」

陽菜さんは私の当麻さんに対する気持ちを知っているので、すぐに引いてくれます。

陽菜さんは私のよき理解者でもあります。

詩歌「ありがとう、陽菜さん。買い物は今度行きましょ」

陽菜「オツケー。それじゃ、じゃあねー」

そして陽菜さんと別れを済ませ、校門を出ると後輩の黒子さんを見かけました。

詩歌「あら、黒子さん。これから、ジャッジメントですか？」

彼女は少し前に急な部屋替えをして師匠を困らせたので、師匠の代わりに肉體言語で社会のルールを叩き込みました。

それ以来、従順でかわいい後輩になりました。

それに美琴さんの妹らしいです。

ということは、美琴さんの姉貴分である私の妹分でもあります。

なので、ときどき面倒を見てあげています。

黒子「は、はい、そうですの、詩歌先輩。詩歌先輩はどちらに？」

詩歌「ええ、これから兄さんの高校に行こうと思っているの」

黒子「でしたら、私がそこまでお送りしますの」

一秒でも早く当麻さんに会える…それは魅力的な提案です。しかし、黒子さんの仕事の邪魔をしたくなかったし、なによりかわいい黒子さんを当麻さんに会わせたくなかったので断ることにしました。

詩歌「いいわよ、黒子さん。黒子さんはジャッジメントの仕事を頑張ってるね。…でも」

スッ

私は一瞬で間合いを詰め、黒子さんの肩に手を置き、耳元で囁く。

詩歌「あんまり、遅くに帰って師匠を困らせないでね。もし…困らせたら…」

黒子「は、はい、わかりましたですの。詩歌先輩！」

黒子さんは逃げるようにテレポートで去ってしまいました。

詩歌一（遅刻しそうだったのかしら？まあでも、黒子さんの能力はコピーできましたし）

私の能力は、条件はありますが相手の能力を理解し、使うことができる能力であります。

能力名は当麻さんの〈幻想殺し〉にちなんで〈幻想投影〉と名付けました。

ふふふ

あまり騒ぎになりたくないのも陽菜さんに協力してもらって、対外的には私はLevel 3程度の発火操作能力となっているのでその名を知る者は少ないけど…

でも、この能力のおかげで様々な能力者を開花させることができ
ましたし、美琴さんがLevel5にまで成長するのに一役買ったこと
もできました。

本当に役に立つ能力です。

そうして私は黒子さんのテレポートを使って、当麻さんの高校の近
くへ移動しました。

Side out

美琴 side 道端

「キミかわいいねー、うひょー、しかも常盤台じゃん!」

「今からオレたちと遊びに行かない？」

「帰りはオレ達が送ってやるから」

「まっ、いつ帰れっかはわかんねーけどさ」

「ピッピッピッピッピッピッ」

ゲームセンターからの帰り道、複数のスキルアウトたちからまれてしまった。

美琴「ふー」

美琴「（私に声かけてくるなんて、バカな連中ね…。まあ、あんまりしつこいようだったら電撃くらわせて追っばらえいいかし、まー…）」

道行く人は中学生が不良にからまれているのに我関せずを貫いている。

美琴「（まあ、別に彼らが薄情って訳じゃないってことはわかってる。実際、ここに割って入っても何ができる訳じゃないし、ケガをするだけだ。誰だって自分がカワイイ、それがフツー。見ず知らずの人間のためにそんな事をするヤツがいたとしたら、ソイツはただのバカか）」

当麻「お、いたいた！こんなとこにいたのか。ダメだろ、勝手にはぐれちゃ」

美琴「は？」

いきなりツンツン頭の男が現れ、親しげに話しかけてきた。

当麻「いやー、連れがお世話になりました。はい、通して」

美琴「ちょっと、誰よアンタ？なれなれしいわね」

私の言葉に周囲が凍りつく。

当麻「おまつ… 『知り合いのフリして自然にこの場から連れ出す作戦』が台無しだろ！？合わせるよっ！！」

美琴「何でそんなメンドクサイ事しなきゃなんないのよ」

私たちの会話でスキルアウトたちが知り合いでないと気付いたみたいだ。

「なんだテメエ、ナメたマネしやがって」

「なんか文句でもあんのか？」

当麻「あー、えーと」

ツンツン頭の雰囲気が変わる。

当麻「はあ…しゃーねえなあ…ああ、そうだよ。恥ずかしくねーのかよ、おまえら」

「なんだと？」

大勢のスキルアウトに凄まれても、その男は怯まない。

当麻「こんな大勢で女の子一人を囲んで情けねえ。大体、おまえらが声かけた相手をよく見てみるよ」

美琴（コイツ…）

当麻「まだガキじゃねーか」

ピシッ

その言葉に私のなにかがキレかけた気がした。

当麻「さっきの見ただろ。年上に払わないガサツな態度」

ビキッ

当麻「見た目はお嬢様でも、まだ反抗期も抜けてねーじゃん」

ビキッ　ビキッ

「よーコイツ、砂にしちまうべ」

バチッ　バッチン

「い…いや、ちょっと待て、なんか様子の変…」

当麻「おまえらみたいにな群れなきゃガキも相手にできないようなヤツらはむかつくんだよっ！！」

そう言い切り、私の方を勢いよく指さす。

その瞬間、完全になにかがキレた。

美琴「私が一番ムカつくのは…オマエだあああッ！！」

ズガッシャア

「ギャウツ」

私の電撃にスキルアウトたちが一瞬で黒焦げになった。

美琴「あー、こんな雑魚共に能力使っちゃ」

当麻「つぶねー。何だあ？今の」

美琴「（えっ！？何でこの男、電撃受けたのに無傷？）」

当麻「何か電撃がビリビリって…何者だ、オマエツ！」

美琴「それはこっちのセリフよっ！何でアンタだけ無傷なわけ？」

当麻「つつか、何でオレまで攻撃？助けに入ったただけなんですけど？」

美琴「んなもん、頼んだ覚えがないっ」

美琴「（一体、なんなのよコイツッ！）」

バチイッ

当麻「のわっ！？また？なんなんだ、このコ。その制服は常盤台だろ？あそこはお嬢様育成所じゃなかったのか？」

美琴（私の電撃を打ち消した？）

美琴「アンタ、何者？何よ、その能力」

当麻「いや、なんて言うか…能力と言っていいのか…身体検査では“Level 0”って判定なんだけど」

美琴「能力…ゼロ？」

彼の言葉に頭が真っ白になる。

美琴「（そんなのありえるはずがないじゃない！？私の電撃を打ち消したのよ！）」

美琴「そんな…。あ…あれ？」

私が呆けているといつのまにかツンツン頭の男は消えていた。

当麻「どいて、どいてーッ」

美琴「あっ、こらっ、待ちなさいよっ!!」

彼はもう人込みの奥へと消え去ってしまった。

美琴「もうっ! なんなのよっ! 今度見つけたら はっ!」

ゴゴゴゴゴ...

その瞬間、背後からものすごいプレッシャーを感じた。

振り向いてみると私の先輩、詩歌さんがこやかに笑いながらこちらを見ていた。

ただし...ものすごい殺気を放ちながら...

Side out

詩歌 side 道端

私が当麻さんの部屋から寮への帰り道

いつものように当麻さんに付き添ってもらっていると向いっついで女の子がガラの悪い男たちからまれていました。

当麻「詩歌、ここでまってる。ちょっと行ってくる」

当麻さんはこつこつのが見過ごせない人なので、すぐに助けに行つてしまいます。

詩歌一（まったく…だから、いつもケガしているのに…でも、だからこそ、私は当麻さんのことが…）

詩歌「当麻さん、それなら私も」

当麻「ダメだ。おまえは女の子だろ。それにオレのかわいい妹だ、傷なんて付けさせられねーよ。なーに、大丈夫だ、穩便に片付けてくるから」

当麻さんはいつも通りに私の助けは不要と言いきって、女の子を助けに行きました。

詩歌一（あの程度なら師匠に鍛えてもらった私なら一瞬で片付けられるのに…でも、かわいいって言ってもらっちゃった…かわいい…てへへ…／＼／＼）

私が当麻さんの言葉を頭の中でリピートしていると向こつこの雰囲気が変わりました。

詩歌一（おそらく、いつもの『知り合いのフリして自然にこの場か

ら連れ出す作戦』が失敗したのでしょう。あれはダメだと言ってるのに…あのフリに自然に合わせられるのは私くらいなものですよ、まったく…当麻さんと合わせられるのは私だけ…ふふふ…／＼／＼)

当麻さんの危機に助けに入ろうとしたとき、見慣れた女の子から電流が迸っているのに気付きました。

詩歌一（あれはもしかして…美琴さん？）

からまれていた女の子が美琴さんだと気付いた瞬間、周囲に電撃が走り、スキルアウトたちを黒焦げにしていまいました。

詩歌一（まったく、自衛のためとはいえ、スキルアウトにあれほどの電流を浴びせるなんて…そんな使い方なんて教えていません…それに電流が効かないとはいえ、当麻さんまで巻き込むなんて…お仕置きが必要かしら…）

近づく私に気づかず、二人は口論しています。

詩歌一（あっ、また電撃を放つなんて…しかも当麻さんに向けて…何もしていないのに…）

美琴さんの電撃に当麻さんは走って逃げてしまいました。

詩歌一（せ、せっかく当麻さんに付き添ってもらっていたのに…当麻さんとの一時が…私の当麻さん分補充の機会が…ふふふ…フッフ…）

美琴「し、詩歌さん、な、何か用ですか？」

ようやく美琴さんは私に気づいたみたいです。

しかし、なぜかとても怯えています。

詩歌一（こんなに怯えちゃって、どうしちゃったのかな…でも、どんなに怯えてもお仕置きするのは変わりません）

詩歌「美琴さん、先ほどの行為見ていました。自衛のためとはいえ人にあれほどの電撃を浴びせるなんて…そんなことをするために私は美琴さんの能力開発に付き合ってたわけではないですよ」

美琴「え、えーと、それはその…」

反省しているのか美琴さんはバツが悪そうな顔をします。

詩歌「それに助けに来た人にまで電撃を浴びせるなんて…美鈴さんになんていえばいいのかしら」

美琴「それは！あいつが私のことバカにするから、つい…」

その発言で美琴さんに情状酌量の余地がないと判断しました。

本当に、かわいい妹分である美琴さんをお仕置きするのは心が痛み

ます。

でも…

詩歌「つい、で助けに来た人に電撃を…私の愛しの当麻さんに電撃を…」

そう、私の当麻さんに電撃を放つなんて極刑ものだから仕方ありません。

妹のような美琴さんにお仕置きするのは本当に心が痛みます

何故か周囲の人たちが私たちを避けてきます。

詩歌「（おかしいですね、母さんからの教え“辛い時ほど笑え”を実践しているだけなのに）」

美琴「し、詩歌さん、落ち着いて！周りの人たちも怯えていますよ」

詩歌「あれ？そうですね。何か恐ろしいものでも見たのでしょうか？一体何なんでしょうね、美琴さん」

美琴「そ、それは、詩歌さんが…」

詩歌「あら、おかしいわね美琴さん、私はただ笑っているだけです。よ。どうして怖がる必要があるのですか？」

「「「ひいつ!?!」」」

もしかしたら、笑みが足りなかったのかもしれない。

そう考え、笑みを深めたら周囲の人にさらに怯えられ、悲鳴まであげられた。

まったく、笑っているだけなのに…

詩歌「皆さん、怯えていますね…でも、それがどうしたと言っの？私の至福の一時が邪魔されたことと美琴さんをお仕置きするのに何か関係があるの、美琴さん？」

美琴「し、詩歌さん、先ほどから何を」

スッ

美琴さんが何かを言いきる前に一瞬で美琴さんの背後に回ります。

美琴「ひいつ!?!」

そして優しく頭を抱き抱えます。

詩歌「大丈夫、痛くないから」

美琴「ふえっ、何が」

ゴキッ

私はそのまま電撃を出す時間など与えずに美琴さんの首を捻り意識を刈り取ります。

このくらい師匠に鍛えられた私には造作もないことです。

そして気絶した美琴さんを抱き抱えると周囲の人たちが逃げて行きました。

詩歌「ふふふ、皆さん、一体何に怯えているのでしょうか?」

そう呟き私は美琴さんを抱え寮へと向かいました。

S i d e o u t

美琴 s i d e 美琴と黒子の部屋

黒子「お、お姉さまっ!!--黒子はもう!!--」

身に迫る危険を感じ、意識が一瞬で覚める。

目を開けると黒子が下着姿で私に飛びかかって来ていた。

美琴「こ、の変態がー!!」

黒子「ギャー!!」

あまりの光景におもわず黒子に電撃を与えてしまった。

美琴（あちゃー、また人に電撃喰らわせちゃった…って、あれ？）
ベットから起きあがってみようとすると上手く身動きが取れないこ
とに気付く。

美琴「あれ、何で手錠を付けてるの？それにどうしてスカートが
脱がされて、シャツのボタンが2つ外れているの!？」

そう、なぜか私は後ろ手に手錠をかけられ、スカートが脱がされ、
上着のボタンが2つ外れていた。

幸い、下着はギリギリで見られないようだ。

美琴「くっ、一体だれが…はっ!」

そのとき、私の脳裏に先ほどの出来事と詩歌さんの恐ろしい笑顔が

思い浮かんできた。

美琴「（ひ、ひい…あんなに怒った詩歌さんは初めてみたな…いつもは拳骨一発なのに、ここまでするなんて…でも、とりあえずこの状況を何とかしなくちゃ…黒子が起きる前に）」

私はこの状況を抜け出すために周りを見ている。

そしたら机の上にメモが置いてあった。

『美琴さんへ 鍵は黒子さんに預けました 詩歌より』

美琴「はあああつ！！じゃ、じゃあ黒子から鍵を取らなきゃいけないの！？」

美琴「（ただでさえ腕が使えないのに、服装が乱れたまま黒子から鍵を取り上げなきゃいけないなんて…これじゃまるで癡猛なライオンの檻に手を縛られたまま入れられ、しかも檻の鍵はライオンの首輪についている状況とまったく同じじゃない！）」

私は黒子が起きないようにそつと近づき様子を見ている。

すると気配に気づいたのか黒子はいきなり起きあがってきた。

黒子「お姉さまあー…黒子の…黒子の身体が熱いんです…黒子もう我慢できませんの…！」

美琴一（黒子の様子がおかしい…一体何が？…ん？）

ふとメモの裏側を見てみると何かが書いてあった。

『黒子さんには媚、げふんげふん、自分に素直になる薬を混ぜたクッキーをあげました。効き目はおそらく30分程度で切れると思います
ます 詩歌』

美琴「……ねえ、黒子…詩歌さんから何か貰わなかった？」

黒子「詩歌先輩が先ほど私にいつも風紀委員を頑張っているご褒美だと言ってクッキーをくださいました…ええ、とても美味しいクッキーでしたわ」

美琴一（な、に、やってんだー、あの人は！！）

黒子「お姉さま…！黒子をどうか…どうか鎮めてくださいー！！」

その後、ドアの前で待機していたのかすぐに詩歌さんが飛び出してきて黒子を眠らせてくれた。

詩歌さんは『あれ？この薬、当麻さんには全然効かなかったのに…』とぶつぶつ呟き、私に謝罪し、手錠もほどいてくとすぐに部屋から

出て行った。

おかげで無事だったが、もう2度と詩歌さんを怒らせないことを誓った。

S i d e o u t

陽菜 s i d e 詩歌と陽菜の部屋

詩歌「ふーむ…この薬黒子さんには確かに効きましたのに、どうして当麻さんには効かないのでしょうか?」

先ほどから怪しい小瓶を見つめながら唸っているのは私のルームメイトの上条詩歌だ。

陽菜「なあなあ、詩歌っち、先ほどの騒ぎはなんだったんだ?」

先ほど御坂っちの部屋から叫び声が聞こえてきた。

常盤台のEースにあそこまで叫ばせる生徒は詩歌ぐらいしかいないだろう。

詩歌「ええ、ちょっと黒子さんと不良品かどうかのテストを げぶんげぶん、ちよっと美琴さんにお仕置きを。今日、当麻さんと寮へ

戻っている途中で美琴さんがスキルアウトの方々に電撃を放っていましたので…それに、助けようとした当麻さんにも…」

陽菜「あちゃー、御坂っち、運が悪かったなー。詩歌っちのお兄さんの当麻っちに電撃を放ってしまうなんて…そんなことしちゃったら、詩歌っちがぶちぎれるのも無理ないわ」

詩歌っちはどうやら実の兄である当麻っちに本気で懸想をしており、お嫁さんになるために努力しているらしい。

それが小学校の頃から続いているのだから驚きだ。

最近では、詩歌っちが舞夏っちと一緒に当麻っちを籠絡する作戦を考えているのをよく見る。

陽菜「まあ、たしかに当麻っちはいい男だけどねえー…／＼／＼つて、そんなこと考えたらダメっ！もし詩歌っちに勘付かれたら恐ろしいことになる…）」

昔、当麻っちに会ったとき、詩歌っちに『いい男だね、惚れちゃいそうだよ』と言ったら、ものすごい殺気をぶつけられ冷や汗をかかされたのを今でもよく覚えている。

まだあのときはあの鬼の寮監から鍛えられていなかったのにだ。

今では寮監に鍛えられたせいか、さらに恐ろしくなっている気がする。

陽菜「あはは、そりゃ仕方ないねー。御坂っちが悪いわ」

正直、やり過ぎている気がしないでもないが、当麻っちが関わっている詩歌っちは絶対に相手しない方がいい。

これは小学校から親友を続けている私が言うから間違いなしだ。

詩歌「あら、陽菜さん。今、当麻さんのこと考えませんでしたか？」

陽菜「そんなことないよー、詩歌っちの気のせいだよ。それよりも明日の課題を見せておくれよ、私、まだやってなくてね。詩歌っち、お願い！」

詩歌「もう仕方ありませんね、陽菜さんは…教えてあげますからみせてください」

陽菜「ありがとー、詩歌っち」

詩歌「ふふふ」

陽菜「（でも、当麻っちが関わんなきゃいい子なんだよなあー。この前もお嫁さんにしたい女子生徒第一位になったしなあ）」

詩歌は男子からの人気が高い。

見た目は小さくて可愛いし、顔もよく、スタイルもいい。

性格も穏やかで人当たりもよく面倒見がいい。

さらに家事は万能で、勉強もでき、教え上手。

おそらく、この常盤台中学で詩歌っちを嫌いな人はいないだろう。

なんだかんだでみんなお世話になってるし

陽菜「ほんとっ、極度のブラコンじゃなきゃなあー」

詩歌「陽菜さん、何か言いましたか？」

陽菜「いや、なにも。詩歌をお嫁さんにする人は幸せだなあって言ったの」

詩歌「ふふふ、誉めても何も出ませんよ。それに私には当麻さんという心に決めた人がいますから」

陽菜「そっかあ…」

陽菜「ほんとに残念だなあ…」

こうして私は詩歌に課題を教えるもらいました。

UJU

幻想御手編 連続虚空爆破事件

幻想御手編 連続虚空爆破事件

詩歌 side 公園

「上条詩歌さん、あなたのことが好きです！付き合ってください！」

詩歌「ごめんなさい。私、心に決めた人がいるのであなたとお付き合えることはできません」

放課後、外に一人で歩いていたら見知らぬ人にいきなり手を引く張られ公園に連れてかれ告白されてしまった。

おかげで美琴さんとの約束に遅れてしまいそうだ。

というわけで、いつも通りさっさと断って去ろうとしたとき、諦めきれないのか私の手を掴んできた。

詩歌「すみません、離してくれますか。私これから約束があるので

」

「嘘だ！俺はずっと詩歌さんを見てきたけど、親しくしていた男はあの愚鈍な兄以外いなかったはずだ！そんな人がいるはずがない！」

どうやらストーカーだったらしい。

「俺は長点上機学園のエリートでLevel 4だぞ！同じ5本の指に入るエリート者同士だ！付き合えばきつとお互いうまくいくはずだ！だから付き合おうじゃないか」

それに面倒な相手でもあるらしい。

詩歌「そう言われましても、今日初めてあった相手と上手くいくかどうかなんてわかりません！それに少なくとも告白を強要する人とは上手くいくとは思えません」

そう言い切ると目の前の男は舌打ちをして急に雰囲気を変える。

「貴様！この俺に恥をかかせるのか！どうやら痛い目に会わないとわからないらしいな」

ゴゴゴオー

急に風が強くなってきた。

「俺の能力は風力操作。このように鎌鼬をつくりだすこともできるんだぜ」

そう言い男が手を振りかざすと風が吹き荒れ、木が真っ二つに切れた。

「ほら、貴様もあの木のようになりたくなければ俺の言うことに従え。言っておくが俺はこの力でスキルアウトどもを一網打尽にしたこともあるんだぞ」

男は自慢げにそう言い放った。

詩歌「そうですね…」

その言葉を承諾と解釈したのか目の前の男は気を良くしたみたいだ。

うんうんと頷き私の手を引きどこかに連れて行くこととする。

「そつだ。従順な女は俺の好みだ」

詩歌「平気で人を傷つけるような人とはお付き合いすることは絶対にありません。さようなら」

笑顔で告げられたそれに相手は一瞬呆ける。

その際に　す、と私は片足を一步後退させる。

「なっ！？ふざけ」

男が振り向いた瞬間、私は男に延髄蹴りを放ち意識を刈り取る。

「がはっ」

男は鎌鼬を作る暇もなく白目をむいて気絶してしまった。

師匠仕込みの蹴りだ。相手は何が起きたかなんてわからないだろう。

詩歌「それと当麻さんを馬鹿にする人は大嫌いなんです」

そうして私は男を放置したまま美琴さんの待ち合わせの場所に急いだ。

Side out

佐天side 道中

佐天「んーっ、おわったあ」

放課後になり私は凝り固まった体を背伸びしてほぐし、私の友達の

初春に声をかける。

佐天「これで明日の終業式が終わればついに夏休みだねっ！」

初春「そうですねえ…あ！！御坂さん」

知り合いでも見つけたのか初春は子犬のように手を元気よく振りながら声を張り上げる。

美琴「ん？お」

その声で気付いたのか向こうで佇んでいた女性がこちらに振り返った。

美琴「おっす そっちはお友達？」

佐天一（ん！？あの人に来てる制服って確かあの5本指のエリート校の常盤台じゃない）

初春「はいっ！これから一緒に洋服を見に」

私はそんなエリート校の人に気軽に話しかけている初春をこちらに引きずりこむ。

佐天「ちよつと！あの人常盤台の制服着てんじゃない！知り合いなの？」

初春「ええと…ジャツジメントの方で間接的に…。しかもあの方はただのお嬢様じゃないんですよ」

初春は自慢げな顔をして指をチツチツと振る。

初春「Level5！」

佐天「Level5!？」

そして一拍置き、初春は勢いよく彼女に手を差し向け

初春「それも学園都市最強の電撃使い、あの<レールガン>の御坂美琴さんなのですっ！！」

佐天「ウソ…まさかあの<レールガン>？」

初春「そうですよ。私こないだ生で見ちゃいました」

初春はそのときの光景を身振り手振りを交えて語る。

そのことに感動した私はおもわず御坂さんの手を握り締める。

佐天「あのっ…あたし佐天涙子です！初春の親友やってます！！」

美琴「そ…そう、よろしくね」

そのとき向こうから常盤台の制服を着た人が手を振りながらやってきた。

詩歌「美琴さん、遅れてごめんね。ちょっと野暮用ができちゃって…ってそちらの方は？」

佐天一（なにこの人…まるで聖母のような微笑み…）

私が向こうからやってきた女性の微笑みに見惚れてると美琴さんが紹介してくれた。

美琴「えーっと…花飾りをつけている方が黒子の同僚の初春飾利さんでこちらがその友達の佐天涙子さんです」

初春・佐天「…よろしくお願ひします」「」

美琴「そしてこちらが私の先輩で幼馴染の上条詩歌さんです」

詩歌「よろしくね、佐天さん、初春さん。ふふふ、何か悩みがあったら相談してね。先輩として力になってあげるから。それから、私のことは名前で呼んでくださいね」

詩歌さんは再びあの誰もが見惚れるような微笑みをこちらに向けた。

佐天一（詩歌さんの微笑みを見てると心が安らぐみたい…）

詩歌「それでお二人はこれからどちらに？」

しかし、その微笑みを見て呆けてしまっているのか私と初春は詩歌さんの質問に答えられなかった。

詩歌「えーっと、お二人はどうしちゃったのかしら？大丈夫？」

詩歌さんがそんな様子の私たちに心配したのか、もう一度、声をかけてきた。

その声でようやく私と初春は意識を取り戻す。

佐天「す、すいません、ぼーつとしちゃって！え、えーつと、これから私と初春はセブンスミストで洋服を見に行こうかと…」

詩歌「あら！それなら私と美琴さんも一緒にしてもいいかしら。美琴さんもそれでいい？」

美琴「そうですね。私もそろそろ新しい服を買いたいですしね」

初春「もちろん大歓迎！！…ですけど」

佐天「あたしらが行くこうとしているのフツのチェーン店ですよ？常盤台の人が行くような所じゃ…」

美琴「いや…あんまそーゆーの関係ないわよ。ウチって外出時が制服着用が義務付けられてるから服にこだわらない人結構多いし」

詩歌「それに私たちは別にお嬢様というわけではないのよ…だからチェーン店にも行くし、コンビニで立ち読みしたりしてるわ」

佐天「そうなんですか？」

その意外な真実に驚き、私たちはセブンスミストへ向かった。

S i d e o u t

詩歌 s i d e 道中

佐天「でもLevel15かあ…スツゴイなあ…あ <レベルアップ
I>があつたらなー」

初春「え？何なんですかそれ」

佐天「いやあくまで噂だし…詳しいことはあたしも知らないんだけど…あたしたちの能力のLevelを簡単に引き上げてくれる道具があるんだって。それが<レベルアップ>…ま、ネット上の都市伝説みたいなもんなんだけどさ」

<レベルアップ>、その言葉を聞いたとき、美琴さんが顎に手を添え、何やら考え事をしている表情になる。

初春「そりゃそうですね。そんなのがあつたら苦労しません」

佐天「でもさ…本当にあるならあたしでも…」

佐天さんはそう眩き顔を俯けた。

初春「？佐天さん？」

どうやら佐天さんはLevelに関してコンプレックスを持っているようだ。

詩歌「佐天さんは高位の能力者になりたいの？」

佐天「そりゃなりたいですよ。せつかく学園都市に来たんですから高位能力者になってみたいじゃないですか」

詩歌「そう…でもLevelだけが学園都市のすべてではないと思
うわ」

佐天「えっ、だってLevelさえ高ければみんなからも認められるんですよ」

詩歌「たしかにLevelが高いということは一種のステータスではあるわね…でもね、佐天さん、私はそれよりも大切なものがあると思うの」

私は一拍置いて初春さんに目を向ける。

詩歌「私は人生の中でも人との出会いが最も大切な事だと思っているわ。そして、お互いが親友と呼べる人との出会いは掛け替えのない宝物のように思っている。そう、今の佐天さんや初春さんの関係みたいだね」

佐天「あっ」

初春「たしかに…そうですよね…」

佐天さんと初春さんは互いに見つめ笑いあう。

詩歌「もちろん、私も今日、佐天さんや初春さんと出会えたことはとてもうれしいことだと思っているわ」

佐天「そ、それは私もそう思ってます！」

初春「はいっ！私も詩歌さんと会えてよかったって思ってます」

詩歌「ふふふ、ありがとう、佐天さん、初春さん それじゃあ、お近づきの印としてクレープ買ってきてあげるわね」

佐天「えっ、いいですよ。そんなの詩歌さんに悪いじゃないですか」

初春「そうですよ、詩歌さん」

詩歌「いいのよ、これは先輩としての甲斐性なんだから後輩たちは黙って奢られなさい。それともダイエット中だったかしら？」

佐天「いえ、別にダイエットというわけでは…」

初春「はい、ダイエットはしてませんけど…」

詩歌「ならいいわね。それじゃあ、二人は何味がいい？」

やっと私の押しに負けたのか二人はそれぞれ食べたいクレープを選ぶ。

詩歌「それじゃあ、出来上がったら持っていくから二人は先に行つて。美琴さんはクレープを運ぶのを手伝ってね」

美琴「はい、詩歌さん」

佐天「えーっ！？そんな詩歌さんや御坂さんにそんなことまでさせられないですよー！」

初春「そうですね！詩歌さんや御坂さんにそこまでさせるなんてできませんよ！」

詩歌「気にしなくていいのよ。美琴さんも先輩なんだから後輩の面倒見なくちゃね。ね、美琴さん」

美琴「そうよ、二人とも。後輩なんだから気にしなくてもいいわよ」

詩歌「もし2人が気にするようだったら、今度は二人が後輩の面倒を見てあげなさいね」

佐天「はい、今度は私たちが後輩の面倒を見ます」

初春「はい！詩歌さんみたいな先輩になります！」

ようやく説得できたのか二人は納得してセブンスミストへ向かった。

詩歌「ふふふ、いい人たちね　ところで美琴さん」

二人が去ったので美琴さんに先ほどのことを聞いてみる。

詩歌「先ほど佐天さんがくレベルアップの話をしたとき、急

に考え事をしていましたが何かありましたか？」

美琴「え、どうしてわかつたんですか!？」

詩歌「ふふふ、美琴さんは大切な妹みたいなものですからちょっとした仕草から考えていることなんてすぐにわかりますよ。何か悩みごとですか？」

美琴さんは隠し事ができないと思ったのか溜息を吐くと先ほど考えていたことを語ってくれた。

美琴「最近多発している連続爆破事件が<書庫>にデータがない高位能力者による犯行であることを黒子から聞きました…もしかしたら、さつき佐天さんが言っていた<レベルアップ>で急激に力をつけた能力者が犯人かも…って、まさかそんなことありませんよね! <レベルアップ>なんて都市伝説にすぎないんですし…」

美琴さんは手を振りながら自身の考えを否定しました…が

詩歌「いえ…<レベルアップ>は存在するかもしれませんがよ。実際に私の能力が存在するわけですし…私の能力が能力者に力をつけさせる手助けができるように、<レベルアップ>にも同じような事ができるかもしれません…美琴さんも私の能力にはお世話になっていると思いますけど」

美琴「確かにそうですけど…」

そう、私の能力は能力者に力をつけさせるのに適している。

その力は美琴さんがLevel1からLevel5にするのを手助けしたほどだ。

そのことを思い出したのか美琴さんは再び顎に手を添えて考え事を始めた。

美琴「でも、詩歌さんの能力はほとんど誰にも知られていない能力で、しかも原石だから同じような能力者はほとんどいないんじゃないですか…私、今まで詩歌さんみたいな能力なんて<書庫>で見たことがありませんよ」

美琴さんは私の方を振り向きそう訴えた。

まるで<レベルアップ>なんて存在しないと

詩歌「学園都市なら私と同じではないにしても、能力者に短期間で力をつけさせるものが存在するかもしれません。それに」

一拍置き、美琴さんの目を見て答える。

詩歌「存在の否定なんて誰にもできることではありません…美琴さんもこの前、都市伝説の一つである“どんな能力も打ち消してしまう能力者”に会っているかと思えますよ」

詩歌一（まあ、当麻さんなんですけどね…）

その瞬間、美琴さんの顔が赤くなりわたわたと慌てはじめた。

美琴「ふえっ！？もしかして、あのこと見てたんですか!？」

詩歌「ええ、美琴さんが不良にからまれていたところに現れた男の人でしょう？私もあの場にいましたからそのときは覚えてますよ」

詩歌一（ええ、あのとときの当麻さんとの逢瀬を邪魔されたことは今でもよく覚えています）

美琴「そのときのことでしたか…あっ!？」

美琴さんは違うことを想像していたのかどうやらほっとしたみたいだ。

しかし、もう遅い。私にばれたらまずいことといっことはすぐわかりました。

美琴さんも私に気づかれたと勘付いたようで、私から後ずさり離れて行きます。

詩歌一（もしかして…また美琴さん、当麻さんに会ったのかしら？

一体何があったのかしら？ふふふ…これは問い正さなくてはいけませんね…フッフ）

詩歌「あらあら美琴さんはまた何かをやらかしたのかしら？もしかして、あの人と決闘なんてしちゃったりしたのかしら？」

美琴「うっ！！そ、それはその…え、えっとですね、詩歌さん」

凶星を突かれたのが美琴さんはしどろもどろになり目を泳がせている。

何とか誤魔化そうとしているが何かあったのはばればれである。

詩歌「美琴さん…何があったんですか？…」

私は話しやすいように笑みを浮かべ問いただしてみる。

美琴「ひ、ひいっ！！」

せっかく笑みを浮かべているのに美琴さんはより後ろに下がってしまった。

詩歌「あらあら、どうして後ろに下がるのかしら？私はただ何があったのかを訊いてみただけですよ…よほど後ろめたいことでなければ話せるはずですよね、美琴さん？」

美琴「そ、その、ごめんなさい」

詩歌「謝罪はいいから何があったのかを話してくれるかしら、事細かく、嘘偽りなく…ね」

その後、美琴さんは当麻さんと偶然出会い決闘を申し込み決闘したことを詳細に話してくれた。

私は話しやすい雰囲気になろうと笑みを深めたが、なぜか深めるたびに美琴さんは私から離れようとする。

詩歌「ふふふ、美琴さんも懲りませんね…あれだけお仕置きしたと言いつのに…でもまあ、美琴さんのこの性分は幼いころからずっとなので仕方ありませんかね」

美琴「詩歌さん…お仕置きは勘弁してください。もうしませんから」

美琴さんは少し泣きながら下が地面なのに構わず私に土下座した。

詩歌「あらあら、美琴さん、そんなことしたら洋服が汚れてしまいますわよ。ほら、立ちなさい」

美琴「は、はい…」

私の言うことに従順なのか美琴さんは土下座を辞めすぐに立ち上がった。

私は隣に立ち美琴さんの服に着いた土をはたいて落とし服を整える。

美琴「し、詩歌さん、辞めてください、自分でやりますから」

そのことが恥ずかしいのか美琴さんは顔を赤らめ私から逃げようとする。

しかし、私はすぐに美琴さんの手を掴み逃げられないようにする。

詩歌「ふふふ、別に恥ずかしくなくてもいいのよ。幼い頃、砂場で遊んだ後いつもやってあげたじゃない」

美琴「それは幼い頃の話で…」

詩歌「美琴さんはどんなに大きくなっても私にとってはかわいい大切な妹なんですよ」

美琴「ううう…」

観念したのか美琴さんは顔を真っ赤にし俯かせながらも私に抵抗し

なくなつた。

詩歌「ふふふ、顔を真つ赤にして俯かせるなんて…かわいい…やっぱり美琴さんは私のかわいい妹ですね　でも…」

詩歌「これできれいになりましたね」

ようやく服を整え終わると私は美琴さんの肩に手を置き囁いた。

詩歌「三度目はありませんよ、美琴さん…分かりましたね…」

美琴「はいっ、わかりました、詩歌さん」

詩歌「はい、よろしい」

私は返事を聞き満面の笑みを浮かべて肩から手を話した。

美琴さんはどうやらほっとしたみたいだ。

詩歌「では、佐天さんと初春さんを待たせる訳には行けませんから少し走りますよ、美琴さん」

美琴「はい、詩歌さん」

そうして私たちは両手にクレープを持ち二人のもとへ急いだ。

詩歌一（でも、女の子からの決闘を受け、一晩中追いかけてくをす
るなんて、当麻さんにはお仕置きが必要かしらね…フッフ）

S i d e o u t

美琴 s i d e セブンスミス

あれから私たちは二人と合流しクレープを食べながらセブンスミス
トに移動した。

今は4人で雑談をしながら洋服を物色している最中だ。

佐天「へー、<レールガン>て、ゲームセンターのコインを飛ばし
ているんですか」

美琴「まあ50mも飛んだら溶けちゃうんだけどね」

佐天さんは先ほどから私と詩歌さんの能力に興味津津なのか色々
と質問してくる。

佐天「でも必殺技があるとカッコイイですね。あたしもインパク
トのある能力欲しいなあ お！初春、こんなのだうじゃ？ヒモパン
！！」

佐天さんはにやにやしなからヒモパンを手に持ち初春さんに見せる。

初春「はい！？無理無理無理です！そんなの穿ける訳ないじゃないですか！？」

ヒモパンを見た途端に初春さんは顔を真っ赤にして否定する。

佐天「これならあたしにスカートめくられても堂々と周りに見せつけられるんじゃない？」

初春「見せないし、めくらないで下さいッ……！」

佐天さんはからかいながら初春さんとじゃれついていた。

佐天「ありゃ、残念……御坂さんと詩歌さんは何を探しに？」

美琴「あ、私はパジャマとか」

詩歌「私もパジャマを探しに。最近、体が成長したのか胸のあたりが少しきつくなってきたので」

初春「そ、そうですか」

佐天「たしかに、詩歌さんの胸って大きいですね…少し触ってもいいですか？」

初春「さ、佐天さん、何言ってるんですか!？」

詩歌「ふふふ、いいわよ、減るものじゃないしね。初春さんも触ってみる？」

初春「ええっ!?!いいんですか？」

佐天「やったね、初春。一緒に触らせてもらおうよ　うわっ、片手で収まりきらないこのボリューム!しかもマシユマロみたいにするく柔らかい!」

初春「じゃ、じゃあ私も　うわぁ……すぐ気持ちいい!」

詩歌「ん、くすぐったいからあんまり揉まないで…」

佐天さんと初春さんは詩歌さんの胸に感動しているようだ。

美琴「本当に詩歌さんの胸は大きい…この前、詩歌さんのルームメイトの陽菜さんが分けて欲しいと愚痴っていたわよね…それに比べて私のは…」

私は自分のLevelと詩歌さんのLevelを比べ、その圧倒的な差に絶望した。

美琴「い、いや、私はこれからのはず…母があんな体型なんだから私だって大人になれば…私も詩歌さんみたいにムサシノ牛乳飲もうかしら…」

私が考え事に熱中していることに詩歌さんが気付いたみたいだ。

詩歌「美琴さん、立ち止まってどうしたの？もしかして、美琴さんも私の胸を触りたかったの？」

美琴「そ、そんなわけないじゃないですか！私はただパジャマがどこにあるのかを探していただけですよ」

美琴「（パジャマ売り場ってどこだ）」

私は慌ててパジャマが置いてあるところを探し歩き出そうとしたとき

初春「御坂さん、寝巻ならこっちの方ですよ」

私は反対の方向に向かおうとしたみたいだ。

あまりの恥ずかしさに顔が赤くなるのを感じる。

そしたら詩歌さんが二人に聞こえないように耳元で囁いて来た。

詩歌「美琴さんもすぐに大きくなりますから、そんなに慌てなくても大丈夫ですよ」

美琴「うう…」

詩歌さんには隠し事ができないのか先ほど考えていたことを見破られてしまいます顔が赤くなり俯いてしまった。

結局、私は詩歌さんに手を引かれながらジャマ売り場に移動した。

美琴「（後輩の前であんなところを… あ！）」

パジャマ売り場に着いたとき私の目にとてもかわいらしいパジャマが飛び込んできた。

美琴「ね、ね、コレ、かわ…」

とてもかわいらしいパジャマなので指で示しながら隣にいた佐天さんに意見を聞こうとしたが…

佐天「アハハ、見てよ初春、このパジャマ！！スッゴイセンス！こ

んな子供っぽいいまどき着る人いないっしょ」

初春「小学生の時くらいまではこういうの着てましたけどねー」

私の指は自然と下がっていく。

美琴一（すごいセンス…子供っぽい…小学生くらい…）

二人の容赦ない意見に私の心はかなりのダメージを受けたが、先輩の意地ではれないように誤魔化す。

もし、あのとき佐天さんに聞いてたら立ち直ることができなかったかもしれない。

美琴「そ…そうよね！中学生になってこれはないわよね」

美琴一（中学生にこれはない…グスツ…）

何とか誤魔化せたのか二人は気にせず水着を見に行ってしまった。

しかし、ここに誤魔化せない人がいた。

詩歌「ふふふ、私はこのパジャマとてもかわいらしいと思うわよ。きつと美琴さんにもお似合いだと思います」

そう、私の幼馴染でお姉さんの詩歌さんには全てお見通しだった。

美琴「（うう…詩歌さんには隠し事はできないわね…）」

詩歌「それじゃあ、私は二人の気を引いているからその間に済ませ
ておくのよ」

そう囁いて詩歌さんは水着売り場へ向かい二人の会話に交じる。

美琴「（いいんだモン！どうせパジャマなんだから他人に見せる訳
じゃないし！…初春さんたちは詩歌さんが気を引いてくれるし…」

一瞬、姿見で合わせてみるだけなら　それっ（

私は意を決してガラスでパジャマの姿見を試してみる。

が

当麻「何やってんだ、オマエ…そんな挙動不審で…」

ガラスに呆れた顔したあのツンツン頭の男が映っていた。

美琴「……ッ？……ッ!？」

美琴「（よりもよって、一番見られたくないヤツに見られてしま
った）」

美琴「な、な、何でアンタがこんな所にいんのよっ!?!」

その言葉にアイツは不満げな顔をする。

当麻「いちゃいけないのかよ」

「おにーちゃん」

口論になりかけたとき向こうから洋服を持った女の子がやってきた。

「このおようぶく…あ！トキワダイのおねーちゃんだ」

美琴「昨日のカバンの子…」

その女の子は、昨日、一緒にカバンを探してあげた子だった。

私は話題を変えるためその子について話しかける。

美琴「お兄ちゃんって…アンタ妹いたの？」

当麻「たしかにいるがこの子じゃない。オレはこの子が洋服店探してるって言うから案内したただけだ」

「あのね、オシヤレなひとはここにくるってテレビでいったの。わたしもオシヤレするんだもん！」

美琴「そうなんだ」

ガチッ

女の子が笑いながら洋服を見せてくれたとき、後ろから何者かがズルリとアイツの頭を見事なアイアンクローで鷲掴みした。

当麻「い、いた、痛いですよー！？一体誰ですか！？私の頭部は人体を吊り上げるために掴む場所じゃ、ないですよー！？」

頭部を襲う痛みに苦しみながらギャーギャーと喚くアイツの足は、地面から10cm程浮いていた。

？「ふふふ、まだわかりませんか？当麻さん」

当麻「そ、その声は、まさか詩歌なのか！？」

詩歌「はい、そのまさかの詩歌ですよ、当麻さん」

そう、後ろでアイツの頭を吊り上げていたのは詩歌さんだった。

しかも阿修羅も逃げ出すような壮絶な笑みを浮かべている。

美琴「し、詩歌さん、一体何が…」

私は詩歌さんの迫力に腰を引かせながらも勇気を振り絞り質問してみる。

詩歌「美琴さん…これから少しグロいものが見えるかもしれませんので、その女の子と一緒にここから離してくださいか」

美琴「は、はい、わかりました」

しかし、返って来たのは避難勧告だった。

「おにーちゃん、おねーちゃんにたかいたかいしてもらってるの？」

詩歌「ふふふ、そうよ。今、お姉ちゃんはお兄ちゃんを世界世界してあげてるの」

当麻「ち、ちょっと待ってください、詩歌さん！今、言葉が違いますでしたか！？世界じゃなくて高いですよねー！？」

詩歌「あらあら、どこが違うと言うのですか？このままいけば当麻

さんは他界してしまうんじゃないですか。フッフ、変な当麻さん」

確かにこのままいったらアイツは言葉通りに他界してしまうだろう。

しかし、女の子は遊んでると思っっているのかキヤイキヤイとはしゃいでいる。

「いいなあ。わたしもたかいたかいしてほしいなあ」

当麻「いやいやいや、これはそんなもんじゃありませんこと」

詩歌「黙れ」

詩歌さんの発言でアイツは何もしゃべらなくなった。

詩歌「ふふふ、じゃあ次はあなたを高い高いしてあげますね。でも今はお兄ちゃんを尋問、ゲフンゲフン、他界他界してあげてますから、あそこにいるお姉ちゃんと一緒にそのかわいい洋服を買ってきなさい。美琴さん、よろしくね」

「うん、わかったー」

美琴「はいっ、じゃあお姉ちゃんが付き合っただげるからあそこのレジで服を買いに行こうか」

「うっん、わたし、ひとりでかいものできるもん」

女の子はそういうと一人でレジにいつてしまった。

正直、私はここから離れたかったがこのままいくとアイツの頭部に真っ赤な死に花が咲いてしまいそうだ。

この惨状を止めたいのだが、詩歌さんからにじみ出てくる圧倒的な負のオーラに話しかけることすらできない。

そして女の子がいなくなったのを確認した詩歌さんは尋問を開始した。

詩歌「当麻さん…この前、私がせっかく夕飯を用意して待ってたのに帰ってこなかったことがありましたよね…確か、そのときは友達の家で遊んでいたとそう仰いましたよね…」

アイツはなんとか首を縦に振った。

もはやアイツはしゃべることができないようだ。

詩歌「でも…先ほど美琴さんの話を聞いたら、あの日、当麻さんと

一日中追いかけてこいたようですね…フッフ、意見が食い違ってますねっ！」

メキッ

アイツは慌てて詩歌さんの手にタップしているが、詩歌さんはお構いなしに気合と共に腕に力を込めアイツの頭部を万力のごとく締め上げる。

当麻「がっ…!?はっ…!!!?」

ミシッ

今、鈍い音が聞こえた。

詩歌「別に私は待ち惚けになったことやせつかく作った料理が無駄になったことは怒ってませんよ…ただ私は、当麻さんが女の子をいじめるような鬼畜でそれを誤魔化すために嘘をついたのが悲しいだけです」

そう詩歌さんは言っているが、女神の如き嘲笑を浮かべる詩歌さんの額には、見事な青筋が浮かんでいた。

ベキッ

何かが潰れそうな音が聞こえてきた。

それを確認した私は、顔を青褪めさせながら回想した。

数日前、二人で並んでジュース缶を飲んでいた時のことだった。

あるとき、たしか、詩歌さん、飲み終わったジュース缶を片手で握り潰してリンゴの芯みたいにしたっけ…

しかも、あれってスチールだった気が…

ベキッベキッ

どうしてあのとときの空缶の鈍い音がアイツの頭から聞こえてくるんだろっ…

まるであのとときの空缶みたいにアイツの頭が握り潰されようとしていたのではないか…

詩歌「これは将来、父さんみたいに浮気させないためにも躰けないといけません　ねっ!」

最後の気力を振り絞り、アイツはしばらく手足をバタつかせてもがいていたが、やがてそれも花が萎むようにゆっくりと減衰していき、そして動かなくなった。

当麻「ふ…こつ…だ…」

それがアイツの遺言だった。

私はその言葉を胸に刻みアイツの最後に静かに黙とうした。

S i d e o u t

詩歌 s i d e セブンスミスト

当麻「いやいや、別に死んでませんよ、当麻さんは！何黙祷しているんですかビリビリ！」

美琴「えっ！？そうだったの？てっきりあのままアンタの頭が砕かれたと思ったわ」

当麻「確かに、当麻さんの頭は粉碎されそうでしたけど！…って言うかビリビリ、詩歌にあのときのこと話したのかよ！」

美琴「そうよ！ありのままのことを先ほど全部話したわ！」

当麻「いやいやいや、当麻さんはビリビリをいじめてなんかいませんよ。むしろ逆にいじめられてたと思いますけど。そのところはどうなんですかね！？」

当麻さんは起きあがると美琴さんと口論を始めた。

今では白熱してしまい二人の間にはいるのが困難である。

当麻さんは荒事（半分以上が詩歌）に慣れているのかこの程度のダメージはすぐに回復してしまうそうです。

たしかに意識が落ちたはずなのに一分も経たないうちに目が覚め、今では美琴さんと口論ができるほどです。

詩歌一（並みの回復力じゃありませんね…新しい尋問の方法を考えなければなりませんね…）

美琴「って言うか、アンタ、詩歌さんの何？も、もしかして、恋人！？」

詩歌一（さすが、美琴さん！ずばり正解を言い当てましたね）

美琴さんの発言に私は上機嫌になる。

が

当麻「はあ！？そんなことあるはずがないだろ。詩歌はオレの妹だ」

当麻さんの発言で私の心は冷水を浴びたみたいに一気に冷めた。

詩歌一（まあ、今は妹ですが、いずれ…）

美琴「は…はああああッ！！？」

どうやら美琴さんは私と当麻さんが兄妹であることを知って驚いたようだ。

美琴「嘘！あの詩歌さんとアンタが兄妹なんて信じられないわ！全然似てないじゃない！」

当麻「まあ、その気持ちは分からないでもないが、オレと詩歌は同じ親から生まれた兄妹だというのは事実だ」

詩歌一（まあ、私も密かにDNA鑑定してみました但当麻さんとは実の兄弟でしたしね…）

美琴さんが否定してほしそうにこちらを見つめてきた。

詩歌「当麻さんの言う通り、私と当麻さんは実の兄妹ですよ、美琴さん」

美琴「嘘……いままで詩歌さんにお兄さんがいることすら知らなかったのに……」

詩歌「まあ、聞かれなかったしね」

詩歌一（美琴さんと当麻さんを会わせたくなかっただけですけどね）

美琴さんはそれを聞くと四つん這いになる。

当麻「なあ、詩歌。もしかして、ビリビリがお前の自慢の後輩であるLevelsの<レールガン>の御坂美琴なのか？」

詩歌「ええ、そうよ。って言うか当麻さんと美琴さんはお互いの名前すら知らなかったんですか？」

当麻「そういえば、名前教えてもらってなかったな……まあ、あれから会ったたびに追いかけていたしな……」

まさかの事実である。

お互いの素性を知らずに追いかけてっこをしていたなんて。

美琴「コイツが詩歌さんの兄ということとは私にとっても兄…そ、そんなこと認められるわけないじゃない！私はコイツが詩歌さんの兄だなんて認められないわ！」

詩歌一（まあ、別に私は当麻さんの妹と認められたいわけじゃないですしね…妹じゃなく妻として認められたいわけで…むしろ妹じゃなかった方が今頃…）

当麻「ビリビリが何と言おうが詩歌はオレの妹ということとは変わりねえぞ」

私の考えとは裏腹に当麻さんは美琴さんの考えに反発したみたいだ。

美琴「だからビリビリじゃなくて御坂美琴っ！！」

再び口論になりかけたとき、佐天さんと初春さんたちが駆け込んできた。

初春「詩歌さん、御坂さん！今、セブンスミストが例の爆弾魔の標的になったそうです！」

美琴「何ですって!?!この店が標的?」

初春「そうみたいです。すみませんが避難誘導に協力してもらいますか?」

美琴「わかったわ」

詩歌「兄さんもお願い」

当麻「おう」

緊急事態に先ほど喧嘩していた雰囲気などまったくなくなっていた。

初春「佐天さんも早く避難を」

佐天「う…うん初春も気をつけてよ」

そうして私たちは中にいる人たちを避難誘導することにした。

S i d e o u t

佐天 s i d e セブンスミス

佐天「大丈夫かな、初春…」

私の親友である初春はジャッジメントではあるが私とほとんど変わらない女の子であることを私は知っている。

むしろ、運動能力がかなり低いので私よりもか弱いかもしれない。

そんな初春がもし例の爆弾魔に遭遇したらひとたまりもないだろう。

佐天「よし、私も手伝うぞ きゃっ」

私も避難誘導を手伝おうとしたとき目の前に鋭い目をした男の人が現れ、なぜか私の腕を掴んだ。

佐天一（もしかして、例の爆弾魔!?!）

「俺は例の爆弾魔じゃねーよ」

私の考えを読んだのかその男は苦笑しながら否定した。

佐天一（じゃあ、一体誰、私に何の用?）

「お前は上条詩歌の後輩なんだろ、さっき一緒にクレープを食べていたのを見てたぜ。俺はちょっとアイツに借りがあつてな、そいつを返さなきゃ気が済まないんでね。協力してもらおうか」

佐天一（もしかして、私を人質にして詩歌さんに何かするつもりなの！？）

私は逃げようとしたが男は軽く手を振り私の目の前に会ったマネキンを真っ二つにした。

佐天「ひっ！！」

「あのマネキンのようになりたくなければおとなしくしてるんだな」

私はその男の言うことに逆らえず、頷くしかできなかった。

Side out

美琴 side セブンスミスト

美琴「よしっ」

あれから私たちは分担して中にいる人たちに指示し避難させること

ができた。

美琴「とりあえずこれで全員」

当麻「ビリビリっ！あの子は？」

向こうからアイツが慌てた様子で走ってきた。

詩歌「美琴さん！あの子はそちらにいませんでしたか？」

今度は反対側から詩歌さんが走ってきた。

美琴「いえ、こちらにはいませんでしたが…」

「おねーちゃん」

そのとき初春さんの後ろから先ほどの女の子がカエルの人形を持ってやってきた。

美琴「あれ？さっき、あの子あんな人形なんて持ってなかったのに…一体どこから…」

「メガネをかけたおにーちゃんがおねーちゃんにわたしてって」

当麻「ほ…よかった、無事だったみたいだな…ん!？」

ブン

人形がなぜか中へと引きずり込まれるように収縮していく。

詩歌「ツ!!!？」

その異変を察知したのか詩歌さんが一瞬で女の子のもとに駆け寄り、持っていた人形を奪い去り遠くへと放り投げ、二人に覆いかぶさる。

97

初春「逃げてください!!あれが爆弾ですっ!!!!」

もう爆弾は爆発寸前だった。

美琴（<レールガン>で爆弾ごと吹き飛ばすッ!!）

しかし、焦ったせい<レールガン>に使うコインを落としてしま
う。

美琴（マズった!!間に合）

ドン！！！！

そして私たちは爆風に包まれた。

Side out

爆弾魔 side 店の外

「キヤーー！！」

「何だ！？爆発？」

「逃げ遅れた人がまだ中にいるみたいだぞ」

「ジャツジメントの子を見たって…」

「コレ、マジでヤバいんじゃない？」

「シャレになんねーよなあ」

「危険です！危ないからさがって！！」

爆弾魔「ククク…」

爆弾魔「（いいぞ、今度こそ逝っただろう）」

俺は周りの喧騒から離れ一人自分の能力に歓喜する。

キイイイイン

爆弾魔「（な、何だ？今の感覚…僕自身の力を外から浴びせられたような…ふ、ふふ、まあそんなことより…）」

爆弾魔「スゴイツ！スバラシイぞ僕の力！！徐々に強い力を使いこなせるようになってきたッ！！もうすぐだ！あと少し数をこなせば、無能なジャツジメントもアイツラもみんなまとめて吹き飛ばし！！？」

僕がこれからの復讐について考えて気分が高潮したとき、いきなり後ろから蹴られ吹っ飛ばされ置いてあったごみ箱に突っ込んだ。

爆弾魔「???な???一体何が…?」

美琴「はい？用件は言わなくても分かるわよね、爆弾魔さん」

爆弾魔「（コイツはさっきジャツジメントの子と一緒にいたヤツ…なぜここに!?!それにどうして僕が爆弾魔だと…）」

爆弾魔「な、何の事だが僕にはさっぱり…」

詩歌「ふふふ、嘘はつかなくていいですよ、あなたが爆弾魔である

ことはカエルの人形から判りましたから」

今度は後ろからまたもやジャッジメントの子と一緒にいたヤツが現れた。

爆弾魔「くっ！もしかしてコイツ感知系の能力者なのか」

詩歌「あなたの力は能力はLevel 4相当の<量子変速シンクロトロン>。アルミを基点に重力子を加速させ、周囲に放出することで、アルミを爆弾に変えることができるってところかしら」

爆弾魔「な！？どうしてそんなことがわかるんだ。まだ身体検査ですら判明してないのに！」

美琴「まあ実戦向きではないけど確かにたいしたもんよね…でも残念。死傷者どころか誰一人カスリ傷一つ負ってないわよ」

爆弾魔「なっ！？そんなバカなっ！！僕の最大出力だぞ！！」

美琴「ほう」

詩歌「ふふふ」

爆弾魔「はっ」

爆弾魔「くそっ！今のでぼろが出ちまった！仕方がない、こいつらを吹っ飛ばして口止めをするか。幸い、まだアルミのスプーンは山ほどあるしな」

そうしてカバンにあるスプーンを手にし投げようとした瞬間

ドゴン！！！！

最初に現れた女の子が手に持ったスプーンが跡形もなく吹き飛ばされた。

そうゲームセンターのメダルで

爆弾魔「と、常盤台の<レールガン>」

そして怯んだ隙を突かれ、彼女にあっという間に組み敷かれてしまった。

美琴「暴れてもいいけど今の私に手加減できる保証はないわよ」

爆弾魔「ハッ！今度は常盤台のリース様か」

美琴「あ？」

胸の内にある僕の恨みが溢れだす。

爆弾魔「いつもここで。何をやっても僕は地面に…ねじ伏せられる…殺してやるッ！お前みたいのが悪いんだよ！ジャツジメントだつてッ…力があるヤツなんてのはみんなそうなんだろうが！！」

胸の内にある想いをぶちまける。

すると、彼女は僕の拘束を解き、一歩下がる。

そして

ズガッシャアアン！！！！！！

目の前に思わず背筋が凍るほどの物凄い電撃を発生させた。

美琴「知ってる？常盤台中学のLevel5は元々は単なるLevel1だった…それでもそれは他人の助けを借りながらも頑張つて、頑張つて、頑張つて…Level5と呼ばれるだけの力を掴んだのよ…でもねっ、たとえLevel1のままだったとしても私はアンタの前に立ち塞がったわよ。アンタのやった事は許さないし、それ以上に力に依存するアンタの弱さに腹が立つ！そっちにはそっちの事情があるんでしょうけど相談に乗る前に一発殴らせてもらうわよっ」

その言葉は僕の心を揺さぶる。

彼女の言葉は本物だと心の奥底が告げている。

弱い自分に喝を入れているのが伝わってくる。

真正面から負けるなど伝わってくる。

美琴「それじゃあ、歯あ食い縛りなさい！」

彼女が腕を振り上げたとき、後ろから風が吹き荒れてきた。

「くくく、おもしろえ見せものだったぜ、<レールガン>」

いつものまに大柄な男が現れていた。

腕にさつき見かけた女の子を抱きながら…

S i d e o u t

詩歌 S i d e 路地裏

美琴さんが爆弾魔さんに説教して終わりという場面で私たちの背後から鼻が怪我している男の人が現れた。

腕の中に口を布で塞がれ、震えている佐天さんを抱えて…

詩歌「ふう〜、せつかくこれで終わりだというのに、空気が読めない男のせいで台無しですね」

詩歌「誰ですか？せつかくの美琴さんの説教を台無しにするなんて…あなたは空気が読めないんですか」

「誰だと…貴様、一体どれほど俺を馬鹿にすれば気が済むんだ!!」

私の言葉に男は逆上した。

美琴「誰なんですか？詩歌さんが知っている方ですか？」

詩歌「いいえ、知らないわ。今日会ったのが初対面のはずよ。美琴さんも知らないわよね」

美琴「ええ、知りませんね…」

「テメーら！俺が腕に抱えている後輩が目にはいらねーのか!!」

佐天「んーん」

男は腕に抱えている佐天さんを揺さぶる。

佐天さんは口封じされているので先ほどから呻き声しか上げることが出来ない。

詩歌「思い出したわ、先ほど私に告白して振られたエリート様でしたっけ。鼻が凹んでいたからわからなかったわ」

「くそアマ！貴様のせいだろうが！あの不意打ちのせいで俺の顔が傷ついてしまったじゃねーか！どうしてくれんだよ！！」

男は私の挑発により逆上し、顔が真っ赤になる。

詩歌「それで色男さんは何しにここに来たのかしら？」

「ああ、俺がここに来たのはもちろん貴様に復讐するためだ」

詩歌「（はぁ…やっぱりそうだと思ったわ…でも佐天さんを巻き込むなんて…）」

私が気を引いている隙に美琴さんがコインを構えようとしたが

「動くんじゃない、<レールガン>！少しでも動いたらためえらの後輩を目の前でずたずたに引き裂いてやるぜ！このように　なっ！
」

ビュオオオオオオオー

男は転がっていたポリバケツを竜巻で引き裂く。

佐天「ひいつ！！」

その光景を見た佐天さんは腰を抜かしてしまったようだ。

美琴「くっ！！」

詩歌「あなたは本当に下種ね。見ているだけで吐き気がするわ！」

私はいつもの微笑みを消して男を睨みつける。

「おいおい、そんなに睨めつけて怖いねえ。また不意打ちをくらわされるかもしれねえな…おい！その爆弾魔、そいつらに爆弾を放り込んでやれよ。殺してやりてえんだろ」

男の言葉に爆弾魔はアルミのスプーンを握る。

詩歌一（まずい…今ここで爆発を起こされたら大変なことになる…）

爆弾魔「そ、そうだ、僕はこいつらみたいなエリートが大っ嫌いだ、殺してやりたいほど憎い…」

「そうだろお、そこにいるアマたちを殺してやりたいんだろ…ほら やっちまいな、今ならジャッジメントはこっちに来ないぜえ」

爆弾魔「やってやる、やってやるぞお」

ダメ、このままじゃ、彼は一生後悔することになる。

折角、美琴さんが説得したのに無駄になってしまつ。

なら…

詩歌「爆弾魔さん、あなたの名前は!？」

突然の私の質問に周りは一瞬止まった。

爆弾魔「…か、介旅初矢」

機先を制されたのか介旅さんは戸惑いながらも名前を覚えてくれた。

詩歌「ねえ、介旅さん、あなたは自分を助けてくれなかったジャツジメントが憎くて今回の騒動を起こしたのよね」

介旅「ああそうだ、俺を助けてくれないジャツジメントなんていないからな」

「おい！何やってん」

詩歌「黙りな、下種。私は今、介旅さんと話しているんだよ、部外者は引っこんでな」

私のあまりの豹変に男は金縛りにあつたように固まってしまった。

詩歌「じゃあ、介旅さんは復讐のためにあなたと同じように虐げられている女の子を見捨ててもいいと言うの？それにアンタが嫌っている下種の言うことに従ってもいいというの？」

介旅「はっ…で、でも…」

介旅さんは怯えている佐天さんを見て戸惑ってしまふ。

詩歌「確かに、高位の能力者はとても恐ろしいわ、私だって怖いもの。でもね、私は知っている…どんなに相手が強大な力を持っていても、どんなに自身に不幸が降りかかっても、そして大怪我を負うことになっても大切な人のために自分の信念のために迷わず飛び込んでいける人がいることを私は知っている…」

一呼吸置き介旅さんの目を真っ直ぐ見抜く。

詩歌「“ どうして私を助けてくれたの？怖くなかったの？” と質問したとき、その人が私に言ってくれたわ“ 本当にそうしたいと思うなら、怖くても踏み出すべきだ” って…介旅さんは本当に復讐がしたいの？それとも弱かった自分を変えたかったの？”

詩歌「（そう私が幼い頃に刺されそうだったとき、当麻さんは私を助けてくれた…本当は怖かったはずなのに、逃げたかったはずなのに…それでも当麻さんは絶対に勝てないと思ってた相手に深手を負いながらも勝ち、私を助けてくれた）」

介旅「ぼ、僕は…」

「とつとつやりやがれ！さもないと、おめえを細切れにしてやるぞ！」

ゴオオオオオ

男は近くにあるゴミバケツを再び細切れにした。

介旅「ひ、ひい」

詩歌「だから下種は黙ってる！いちいち口出してんじゃねえ！！
介旅！お前は弱い者の事を良く知っているはずだ！だから暴力の怖さを良く知っている…でも、だからこそ本当の力を良く知っているはずだ！少なくとも、そこにいる恐ろしさを知らず、能力の強さを力と勘違いしたヤツよりもずっとな！本当の力は自分が持つ意思の強さだ！その確固たる意思があるから美琴はLevel5に成れたし、当麻は俺を助けてくれた！だったらテメエも下種になんか負けずに信念を貫き通せ！」

美琴「そうだよ、介旅さん、私は詩歌さんがいう確固たる決意のおかげでLevel5に成れたんだよ…だからアンタも確固たる決意を持ちなさい！」

介旅「うう…」

カラン

私と美琴の言葉に介旅さんは手に持ったスプーンを離した。

介旅「ぼ、僕には彼女たちを傷つけるなんてできない…それをしたら本当にアイツラとまったく同じになってしまっから…そうだったら一生僕の信念が貫徹なくなってしまっ…僕は一体何をしていたんだ…ジャツジメントの人たちを力で傷つけてしまっなんて…僕はなんてことを…」

介旅はまるで懺悔をするかのように四つん這いになり頭を垂れた。

「くそが！やっぱり雑魚はどこまで行っても雑魚だな」

男が手のひらに竜巻を形成して介旅へと向ける。

介旅「できない！力で脅したって僕は屈しないぞ！！」

「じゃあ、吹っ飛びな！」

ビュオオオオオツオ

竜巻の刃が介旅に襲いかかる。

しかし

詩歌「どきな！」

ドンッ

介旅「ど、どうして…」

私は咄嗟に体当たりをして、彼を暴風の外へ追い出す。

詩歌「それは介旅が信念を貫き通したからな。それなら火を着けた俺も覚悟を決めなきゃ、格好良くねえだろ。それにこの程度の攻撃、師匠と比べたら全く痛くないね…まあ、服が破れたのはご愁傷様だけだな」

介旅「はっ／＼／」

私の状態に気がついたのか彼は自分の目を手で覆った。

詩歌「別に見るだけならいいぜ、減るもんじゃないしな」

それでも彼は紳士なのか私を見なかった。

詩歌一（くっくっく、初心だねえ）

「はっ、それならもっと切り刻んでやるよ」

男は周囲にいくつもの竜巻の渦を形成する。

詩歌「残念だけどこの身体はすでに売約済みでね、あんまり下種に晒して汚していいもんじゃないんだよ…美琴、手を出すなよ、コイツは俺の獲物だ」

美琴「はいつ！」

詩歌「いい返事だ」

「お、お前ら、コイツが目に入らねえのか！一歩でもこっちに来たらずたずたにしてやるぞ、いいのか？」

そいつは地面にへたり込んでいる佐天さんを指さす。

詩歌「佐天さん、すぐに助けてあげますから大丈夫ですよ。だから私を信じて少しの間じっとしてくださいね」

その言葉に佐天さんは頷く。

詩歌一（くつくつく、久々に血が騒ぐねえ。陽菜と喧嘩してから、全然暴れてなかったからなあ）

久々の本気に思わず顔に好戦的な笑みを浮かべてしまう。

そのあまりの迫力に周りの人が詩歌の後ろに虎のオーラが見え背景が歪む。

詩歌「それじゃあ、行きますか」

私は男に向かう。

周りの人の目には猛獣が獲物にとびかかるのとまったく同じに見える。

「く、来るなあ！」

男は後ずさり、竜巻を発生させようとする。

が

詩歌一（解析終了…投影終了…干渉開始）

竜巻は私や佐天さんには掠らず見当違いの方向に飛んでいく。

「くそつ、どうなってやがる、竜巻がいうこときかねえ」

私の能力<イマジン・トレース>は相手または相手の能力に触れることで相手の力を解析・複製し、一度だけ30分程度使うことができ、さらにAIM拡散力場さえ複製してしまうため、同調による能

力の演算の補助、共鳴による相手の位置の特定、そして、干渉による能力の演算の妨害すらもできる。

今私がしているのは先ほどの竜巻で複製した相手の能力で干渉して、竜巻の形成を阻止しているというわけである。

「な、何で竜巻が消えてくんだ、どうしてだ！？俺はLevel 4なんだぞ　　ひっ、よ、よるな」

焦りのせいか、とうとう相手は竜巻が形成できないくらい演算力が落ちてしまった。

そうなったら最早私の敵ではない。

私は一瞬で相手との距離を詰める。

詩歌「テメエにオレのとおきを見せてやる」

師匠が言うには、ダメージを与える時、一番大切なのは、与えた衝撃を逃がさないこと。

景気よく音が響くようでは三流。一流は、響く音を出すだけのエネルギーすらも、対象を壊す力として使えるらしい。

もちろん私は師匠のように達人じゃないが、それに近づけようと努力することができる。

そのためのコツは、三つだけ。

速く、強く、精確に。

最短の時間に、最大の威力で、最高の精度で送り込むこと。

「ひいつ」

男の目には詩歌が死神のように見えたのだろうか、その顔はあまりの恐怖に歪んでしまっている。

怯んだ隙に私は雑念を消し拳に力を集中させるために、私のおき…当麻さんの決め台詞を言う。

詩歌「その幻想をぶち殺す!!!」

詩歌の牙がむかれた。

力強い踏み込みから腰の捻りを加えた全身の力を込めた渾身の一撃を相手の腹に喰らわせる。

パンッ

喰らわせた瞬間、時が止まったようになる。

男の顔が徐々に歪んでいく。

「ぐはあ！！！」

その衝撃音は小さく乾いていた。

しかし、それとは裏腹に大柄な男を吹っ飛ばし、掃除ロボットを巻き込むほどの破壊力を秘めていた。

男は白目をむき気絶してしまった。

詩歌「ふうー、私もまだまだだな…この程度しか吹っ飛ばせないなんて…修行が足りないな…それにまだ少し血が滾っているし、帰ったら久々に師匠と組み手でもしようかしら」

周りの人は不満げに右手を見ている詩歌を恐れたのだろうか、おもわず後ずさる。

その後、男は全治一カ月の怪我を負い、さらに女性を見ると怯えてしまうというトラウマができてしまったそうだ。

Side out

美琴 side 路地裏

美琴「やっぱり、詩歌さんを怒らせるのは絶対しないようにしよう

…」

正直、キレた詩歌さんの相手をするのは絶対に避けたい。

私でも一瞬で狩られてしまいそうだ。

詩歌さんを止められるのは肉弾戦で互角な陽菜さんと詩歌さんの師匠である寮監くらいだ。

佐天「って言うか、詩歌さんってこっちが素なんですか？」

美琴「いや…そっちが素というわけじゃないんだけどね…どっちも素って言うか、なんていうか…」

美琴「(ううっ、なんて言いにくいことを…)」

介旅「あの豹変ぶりと強さ…も、もしかして、彼女は常盤台中学でお嫁さんになりたい女子生徒第一位で迷える子羊達を導くと言われてる常盤台中学の<微笑みの聖母>…し、しかし、裏では、常盤台のエースの<レールガン>を従え、常盤台最凶と言われる<鬼火>とも互角に渡り合うという常盤台の秘密兵器の<狂乱の魔女>なのか!？」

佐天「えーっ!?!まさか、詩歌さんってスキルアウトを<鬼火>と共に能力を使わずに素手で収めたと言われるあの伝説の<狂乱の魔女>なんですか!?!そうなんですか、御坂さん!?!？」

美琴「ま、まずいく微笑みの聖母はともかく、狂乱の魔女を詩歌さんの前で言ったら…たしかこの前、黒子はその禁句をうっかり詩歌さんの前で言っちゃった時、どこかに連れてかれ、部屋に戻ってきたらしばらく目の焦点が合わなくなってしまったんだっけ…しかも何かうわ言をしゃべっていたし」

美琴「あつ、だめ、詩歌さんの前でそれを言っちゃ」

しかし、もう手遅れだった。

私たちの後ろには笑みを浮かべた詩歌さんがいた。

詩歌「あらあら、先ほど何か耳障りな事が聞こえましたが何か言いましたか、佐天さん、介旅さん」

私と介旅さんは詩歌さんからにじみ出る負のオーラに金縛りにあつたみたいに固まってしまったが…

佐天「詩歌さん！詩歌さんってもしかしてあのく狂乱の魔女なんですか？」

しかし、佐天さんはそれに気づかなかつたのか、詩歌さんの前でその禁句をしゃべってしまった。

詩歌「ふふふ、佐天さん、少しこちらにいらっしやい」

だめ、向こうに言ったらだめと私は佐天さんに言いたかったがあまりの恐怖の前に口が乾いてしまい何もしゃべることができなかった。

その後、佐天さんは目の焦点が合ってなく、何かうわ言を呟きながら帰ってきた。

そして、私は後輩一人を救えない自分の無力さに涙をこぼした。

Side out

黒子 side 爆破現場

黒子「うっ！！何かいきなり寒気がしましたの」

私はいきなりいやな悪寒を感じた。

黒子「（この感じは確か…）」

そのとき思い浮かんできたのは身も凍えるような冷笑。

しかし、私の危険察知能力がこれ以上思い出すのは危険だと告げている。

これは封印すべき記憶なのだ…

そのとき向こうから初春が女の子を連れてやってきた。

初春「白井さん」

黒子「ああ、初春、無事だったようですわね」

初春「御坂さんのおかげです」

「トキワダイのおねーちゃんが助けてくれたの」

初春「「ねー」」

黒子「お姉さんが…?」

黒子「（初春達がいた場所だけ全く無傷だなんて…能力をどう使ったらこういう風になりますの?）」

Side out

美琴 side セブンスミスト

私は今ある人物を待ち伏せしている。

美琴「（あの時、私のクレールガンは間に合わなかった…実際に初春さん達を救ったのはコイツだ）」

ようやく向こうから今回の目的…上条当麻がやってきた。

当麻「ゲ…待ち伏せ」

私を見た瞬間コイツは心底嫌な顔をする。

詩歌さんのことがなかったらもしかしたら電撃を浴びせてたかもしれない。

美琴「お帰りかしら？」

当麻「言っとくけど、今からお前と相手する気力はねーぞ」

美琴「いいの？何か詩歌さん以外のみんなあの場を救ったのは私だっと思ってるみたいだけど…今名乗り出たらヒーローよ」

当麻「？何言ってるんだ…みんな無事だったんだからそれで何の問題もねーじゃんか。誰が助けたかなんてどうでもいいことだろ」

ソイツはまるで当たり前のことのように言い放った。

自分の名誉なんてどうでもいいと。

美琴「ね、ねえ…最後に一つだけいい？」

当麻「ん？なんだ？」

私は一番聞きたかったことを質問した。

美琴「アンタって幼い頃に詩歌さんを助けたことがあるの？」

当麻「ん？ああ、あれはオレに巻き込まれたせいでもあったけど、詩歌は大切な妹だしな助けるのは当然だろ」

美琴「怖くなかったの…アンタそのときまだ子供だったんでしょ…
それに今日のことだってあの爆弾が怖くなかったの？」

当麻「ああ、確かに怖かったな…けど“本当にそうしたいと思うなら、怖くても踏み出すべきだ”しな…だから今回もオレはみんなを守りたかったから、たとえどんなに危険があつたとしても助けようとしただけだ」

美琴「（やっぱり、コイツが詩歌さんが言っていた…）」

当麻「それじゃ、じゃーな」

そうしてあいつは帰って行った。

「あ、こちらにおられましたか。お客様のおかげで当店から一人の怪我人も一人も出さずにすみました」

セブンスミストの支配人だと思われる人がやってきた。

本来なら私が受け取るはずではないお礼の言葉を言いに。

美琴「誰が助けたかなんてどうでもいい……」

「はい？」

美琴「つて、スカシてんじゃねえー！！思いつきりカツコ付けてん
じゃないのよ！！だぁーム力つく！！私に貸しを作ったんだからち
よっとはエラソーにしろ！！」

ドカ

「ちょ！？お客様！？」

私は胸の内からあふれるこの思いを壁にぶつけることにした。

美琴「（でも…アイツが詩歌さんの兄であることは何となく少しだけだけど認めてもいいわね…あくまで少しだけどね…）」

S i d e o u t

詩歌 s i d e 公園

私は佐天さんを連れて公園にやってきました。

先ほど私のせいで事件に巻き込まれたお礼をするためです。

しかし、佐天さんの足取りは妙におかしいです。

佐天「カミジヨウトウマトカミジヨウシイカハダレモガウラヤムカ
ツプルデス。ワタクシコトサテンルイコハフタリノナカヲゼンメン
テキニオウエンシテイキタイトオモイマス」

そして、佐天さんは先ほどの躰が効いているのかうわ言ばかり言うています。

全くそんなことは誰もがわかることだというのに…

だけど、それをわざわざ口に出して、しかも応援するなんて佐天さんはなんていい人なんでしょうか。

これは私も頑張らないといけませんね、ふふふ…

口惜しいですがそろそろ覚まさせることにします。

詩歌「はい、佐天さん、もう目覚めてもいいですよ」

私は佐天さんの目の前で手をたたく。

パンツッ！

佐天「ハッ！？あたしは一体何を？…それにここは何処？」

その音で佐天さんは意識が覚めたみたいです。

佐天「あっ、詩歌さん、あたしあれからどうしたんですか？人質から解放された後の記憶が少し靄がかかって…ツ！？なんだか思いつくのが危険だと本能が告げているような気がする…」

佐天さんが急にうずくまり頭抱えたので私は心配になり佐天さんの気を落ち着けるように横にしゃがみ背中を摩ってあげることになりました。

詩歌「大丈夫、佐天さん？」

佐天「ありがとうございます ひいつ!!?」

何故か佐天さんは私の顔を見た瞬間、驚き、後ずさってしまいました。

詩歌「どうしたの、佐天さん!？」

佐天さんは何かとても怖いものを見たかのように怯えています。

きっと、人質にされてた時の事を思い出していたんでしょう。

佐天「急に驚いちゃってすみません…あたし何だか詩歌さんの顔を見たら急に震えが止まらなくなっちゃって…はは、おかしいですよ、詩歌さんがあたしに何かしたわけではないのに…」

詩歌「いいえ、変ではないですよ。佐天さんはつい先ほどまで人質になってたんですから、震えてもおかしくはありません…きっと安心して私の顔を見て、気が緩んでしまったんでしょう」

佐天「あはは、そうですね…でもなんでだろう…これは人質になったことが原因ではない気がする…」

詩歌「佐天さん、無理に思い出さなくてもいいんですよ…今は気を落ち着けるのが先決です」

私は気を落ち着かせるように頭を撫でます。

余計な事を思い出さないように念じながら…

すると佐天さんは顔を赤くしましたが特に抵抗せず、徐々に落ち着いてきました。

佐天「詩歌さん、ありがとうございます…もう落ち着きました…」

詩歌「そう？よかったわ、佐天さんが落ち着いてくれて」

佐天「それで詩歌さん、どうして私はここに？みんなはどうしたんですか？」

佐天さんは落ち着くと私に質問してきました。

詩歌「初春さんは黒子さんと一緒に事件の処理、美琴さんは用事があるとしてどこかに行ってしまった。私は…佐天さんが気絶してしまったので、落ち着ける場所まで運び、目が覚めるまで公園で様子を見ていました…」

事実とは少し違いますが、あらかじめ考えておいたセリフを口にします。

これは佐天さんのためです。

世の中には知らないほうが幸せなこともあるんです。

佐天「そ、それはどうもありがとうございます」

そう言うと佐天さんはすぐに頭を下げます。

なんだか、胸のあたりがざわめく…

詩歌「頭を上げてください、佐天さん…先輩が後輩の面倒を見るのは当然のことですよ…それに今回の件は私が原因で起きたことです。私がもう少し丁寧に対応してればこんなことにはならなかったのに。佐天さんに迷惑をかけてしまいました…すみません」

私は頭を上げさせ、佐天さんに頭を下げます。

これ以上、謝罪をさせてしまったら、良心が疼いてしまいそうです。

佐天「いえそんな！？詩歌さんのせいではないですよ…悪いのはあの男のせいですし…」

詩歌「ふう…それじゃあ、おあいこね、佐天さん。この件で謝るの

はやめにしましょう」

佐天「はい、詩歌さん」

よかった。

そして、私は本題に入ることにします。

詩歌「佐天さん、手を出してくれる？」

佐天「え、あ、はい」

私は差し出された佐天さんの手を握ります。

詩歌「佐天さん…あなたは自身が無能力者であることにコンプレックスを抱いてますね…今回の件、人質にされた時も自身にもし力があればと悔やんでいたはずです…」

佐天さんは何も言わず俯いてしまいます。

詩歌「力が欲しいですか？」

その言葉に佐天さんは顔を上げ何も言いませんがその目は私に訴えてきます。

詩歌「わかりました…少し手を貸してあげますね…」

私は佐天さんの中に眠る力と同調して起こしてあげます。

佐天「えっ？えっ？何この感覚！？一体何なの！！？」

未知の感覚だから佐天さんは急に慌てだします。

詩歌「落ち着いて、佐天さん。その感覚に集中して…そう…ゆっくりと…」

すると佐天さんの身体がゆっくりと宙に浮いてきます。

すでに私の手は離れています。

佐天「どうして…あたしが宙に浮いてるの？」

佐天さんは突然の出来事に頭を抱えてしまいます。

詩歌「それは佐天さんがく空力使いの能力者でその力を使って自身を宙に浮かせているからですよ…」

佐天「う、嘘ですよ…だってあたしはLevel10のはずですよ！
そんなあたしが宙に浮けるわけがないですか！？」

詩歌「いいえ、本当です…」

私は自身の能力<イマジントレース>のことを説明します。

詩歌「…私は今、佐天さんを解析、複製、同調し、過去の似たような能力者の経験と演算補助から佐天さんに能力の使い方を教えてあげただけです…最初は手助けしましたが、今は佐天さん自身の力で宙に浮いているんですよ」

そのことを聞いた佐天さんはまるでクリスマスプレゼントを初めてもらった子供のように喜んだ顔をします。

佐天「これがあたしの能力…ッ!？」

しばらく空を飛んでいると佐天さんは痛みが入ったかのように顔を歪めます。

詩歌「佐天さん、もう降りて来てください。そろそろ限界です」

佐天「あ、はい、詩歌さん」

佐天さんは私の言うことに従いすぐに降りて来てくれました。

詩歌「おそらく、普段してないことをしたので佐天さんの脳が疲れてしまったんでしょう…これ以上すると倒れてしまうかもしれません

ん」

佐天「え…でも…」

ようやく手に入った力を手放したくないのか、佐天さんは不満げな顔になります。

詩歌「ダメです。これ以上は危険です。もし納得しないようだったら…拳でわからせてあげますよ」

佐天「はい！わかりました、詩歌さん」

詩歌「うん、よろしい」

先ほどの躰が効いたらしく佐天さんはすぐに返事をしてくれました。

詩歌「今、私が佐天さんを手助けしてあげたのは佐天さんにLevel 10だからといって自身の可能性をあきらめて欲しくなかったからなの…力の無さに絶望し努力をしなくなってしまう、困難から逃げてしまう…今日の佐天さんのこと見てたらそんなこと思っちゃってね…私はそうなってほしくないから少しでも手伝ってあげたの」

凶星を突かれたのか佐天さんは顔を俯けてしまいましたが私は佐天さんの顔を優しく手を添えて目を合わせ優しく語りかけます。

詩歌「でもね、佐天さん…本当の力は意思の強さ、それは自身の信

念によるもの。これだけは忘れないでほしいの…もしこれを忘れてしまったらあの男のように平気で傷つけるようになってしまう…私は佐天さんがそうなってほしくない…だから約束して…」

一呼吸間を置き小指を差し出します。

詩歌「たとえ、どんなに怖くても自分の信念を貫いて…そして、自分の力の怖さを忘れないでね」

佐天「はい、詩歌さん…」

佐天さんは私の小指に自身の小指を絡め約束してくれました。

あたりに穏やかな風が吹いた気がする。

そのことを確認した私は優しく微笑みかけ…

詩歌「ふふふ、よかったわ、もし約束してくれなかったら今回のことを物理的に記憶から削除するところでした」

拳を見せて脅迫します。

だって、躰は大事ですしね。

佐天「え…本気ですか…」

先ほどまでの雰囲気は何処に言ってしまったのか、佐天さんは啞然としてしまいました。

詩歌「ええ、本気よ…あとそれと<イマジントレース>のことは内緒にしてね…もし誰かにしゃべったら…その人にも記憶を物理的に削除しなくてはいけなくなるからね」

男を吹っ飛ばした一撃を思い出したのか佐天さんは青褪めながらも頷いてくれました。

詩歌「それさえ約束してくれば都合があつたとき佐天さんの能力開発に付き合つてあげますよ」

佐天「あ、ありがとうございます、詩歌さん」

詩歌「ふふふ、美琴さんもLevel1からLevel15に成れたのだから、私が付いていますから、佐天さんも諦めなければいつか高位能力者になれますよ」

佐天「はい、詩歌先生、よろしく願います」

詩歌「あらあら」

先生…その言葉に昔、母さんのことを先生と呼んでいたことを思い出し顔がにやけてしまいました。

もっとも、今では当麻さんと結ばれるための最後の難関ですけど…

こうして私と佐天さんお互いの寮へと帰って行きました。

その後、佐天さんは夢でうなされる日々が続いたそうです。

聞いたところによると私によく似た女性が微笑みながら襲ってくる夢らしいです。

そのことを聞いた私はなぜか胸がチクチクしてきました。

つづく

閑話 血塗れのバレンタインデー

血塗れのバレンタインデー

詩歌 side 調理実習室

それはまだ当麻が高校に通う前、中学3年生の時の2月10日のことでした。

その頃の当麻は受験勉強に勤しんでおり、詩歌はそんな彼のため毎日、家事や家庭教師などを請け負い、サポートしておりました。

そして、詩歌は毎年恒例の当麻のために愛情をこめたチョコレートを作成していた時のことです。

詩歌「今年のチョコには、舞華さんから頂いた媚薬を混ぜてみようかしら……いや、ダメだわ、もし私がいなくときにそれを食べたら大変なことになってしまいますからね」

詩歌の目の前には大量のチョコが散乱している。

これら全ての処理は親友の陽菜が妹分の美琴に頼んでいる。

二人以外に試食してもらっても、おいしいとしか言ってくれないので、正確な評価が得られないからだ。

ちなみに、土御門舞華は自身のチョコ作成に忙しいため頼んではない。

しかし、毎年、この時期は一日に十数個のチョコを食べさせられ、感想も強要されるため、美琴はこの時期になると詩歌に近づくかなくなり、詩歌を見かけるとすぐに逃げてしまう。

チョコはとても美味しいのだが、大量に食べさせられるため体重が恐ろしいことになるからだ。

一方、陽菜はそんなことは気にしないため、文句を言うどころか喜んで食べてくれる。

去年はほとんどを陽菜が食べてくれたので助かったが、今年は、ここ最近、陽菜は放課後になるとすぐにどこかに行ってしまう、夜遅くに帰ってくるため作製したチョコはほとんど残ってしまっている。

そのため、美琴を（無理やり）捕まえて、味見役にしてきたが、そろそろ限界なのだろうか、美琴はチョコに囲まれた机の上に突っ伏しうなされている。

詩歌「そろそろ美琴さんも限界ですかね…仕方ありません、陽菜さんを見つけることにしますか…それと、当麻さんが他の方からチョコを受け取るのを妨害するのに必要な道具を揃えなくてはなりませんね」

詩歌は当麻と学校が別れた2年前から2月14日、乙女の聖戦に当

麻がチヨコを受け取るのを阻止するため、様々なトラップを彼の学校に仕掛けている。

去年は朝から下駄箱に原因不明の爆発音がしたり、当麻の机の中に又メツとしたスライムが仕掛けられていたりした。

そして、放課後になると詩歌が教室の前まで来て警戒するため、当麻は家族以外からチヨコが貰えず、周囲に仕掛けられていたトラップも妹が仕掛けたものだとは気付かず、いつも通りに不幸な出来事だと考えている。

詩歌「そういえば、最近、陽菜さんあまり元気がないわね…何かあったのかしら？そのあたりのことも聞き出さなくてはいいけませんね」

そうして詩歌は器具を片付け終わると陽菜を探しに出かけた。

うなされている美琴を残して…

しかし、陽菜さんを見つけることができず、そして、この日から陽菜さんは寮にすら帰らなくなってしまった…

S i d e o u t

陽菜 s i d e 路地裏

「ぐはっ!」

周囲に5、6人のスキルアウトたちが倒れている。

そして、今、ようやく最後の一人が戦闘不能になった。

陽菜「おい、この銃、どうやって手に入れた、答えろ! 答えねえ! と次は拳じゃなくこの炎で炙り焼きにしてやるぜ」

私は最後の一人の目の前に火の玉を発生させ脅す。

「こ、これは三船ってヤツが試供品だと言って俺たちに格安でくれたんだ。おれ達だけじゃねえ、他の奴らだって持ってるぞ」

陽菜「じゃあ、その三船ってやつは何処にいるか、言え!」

「し、知らねえ、あいつらの居場所を俺達は知らないんだ、本当に信じてくれ!」

陽菜「ちっ」

カスッ

顎を揺さぶられ最後の一人は呆気なく気絶した。

陽菜「くそつ、三船の奴何処に居やがる」

最近、武装したスキルアウトが増えてきている。

そして、高レベルの能力者達を襲う事件が多発している。

正直、身近の人が襲われたわけではないので、それくらいなら私はその事件に手を出すつもりはなかった。

しかし、その事件に鬼塚組が関与しているらしいという情報が耳に入った。

その事実確認をしたところ、どうやら鬼塚組の幹部の一人、三船が率いる若手達が裏で手を引いていることが判明した。

鬼塚組は古くから関東を縄張りにしてきた暴力団だ。

しかし、絶対にかたぎの人は襲わず、弱いものが虐げられている時のみ力を使う任侠の者が組員の絶対条件だ。

もし、うちの組の者がかたぎの襲うようなら、制裁を加えるのが鉄の掟となっている。

そして、三船は親父の信頼を裏切った。

三船は元々学園都市出身らしく、そのため学園都市の担当を任せられ

ていた。

だけど、学園都市は外界からは切り離された環境であるせいか、本家はなかなか手を出すことができず、三船達はスキルアウトを使って、武器の性能実験をしているらしい。

おそらく、学園都市製の武器を使い、本家に乗っ取ろうと画策しているに違いない。

これは鬼塚組を守るためにも、唯一、学園都市にいる組長の一人娘である私が三船に制裁を加えなければならぬ。

そう、鬼塚組の跡取りとして…

陽菜「三船にけじめをつけさせる。それまでは絶対に寮へ帰らない」

S i d e o u t

詩歌 s i d e 第10学区

あれから、陽菜さんは連絡もなく、授業にすら出なくなりました。

もしかしたら、最近多発しているスキルアウトの暴力事件に巻き込まれたのかもしれない。

心配になった私は色々な人たちからお話を聞いたところ（肉体言語で）、Hさんから有力な情報を得ることができました。

Hさんはぶつぶつと『狂ってやがる…まさか、こんな女の子に能力も使わず素手で俺達が壊滅されたなんて…』とか『駒場のリーダー並かもしれねえ…魔女か…』とか呟いていましたが、目の前で缶スチールを握りつぶすと従順になってくれました。

大抵の人はこうすると素直になってくれます。

そして、Hさんから得た情報は

- ・ 1か月前から三船という人物から格安で軍用の武器が得られること
- ・ その受け渡し場所が第10学区にある廃ビルで行われていること
- ・ ここ数日、真つ赤な髪の赤鬼と呼ばれる者がスキルアウトの集団を潰し、三船という人物を探していること
- ・ 最後に、今日、2月13日の23時頃に武器が売買されること

おそらく、この赤鬼と呼ばれているのは陽菜さんでしょう。

どうやら、陽菜さんはこの事件と関わりのある三船という人物を探しているらしい。

そして、その絶好の機会である13日の23時、第10学区の廃ビルに陽菜さんが来ることが予想できます。

浜面「な、なあ、俺達はもう行ってもいいですか？」

詩歌「ええ、いいですよ。情報の提供をありがとうございました。」

皆さん、お気をつけて帰ってくださいね　　ああ、それと」

私にはつこりとHさんに微笑みかけて…

詩歌「これから廢ビルには行かない方がいいでしょう…命が欲しければね…」

浜面「お、おう、わかった、あそこには近づかない。駒場のリーダーや半蔵にも忠告する」

詩歌「ふふふ、そんなに怯えなくてもなにもしませんよ…あと、これは親切にしてくれたお礼です、駒場さんや半蔵さんにも渡してくださいね」

浜面「あ、ありがとう…‥‥‥なあ、なんでこの事件に関わろうとしたんだ、見たところ常盤台のお嬢様だろ？」

詩歌「それは、親友のためです。この事件に私の親友が関わっています。彼女は少しうっかりすることがありますから心配なんです。だから、私はこの事件に関わろうとしたんですよ。だって、親友にお嬢様とかどうかや危険かどうかなんて関係がないですしね」

そう陽菜さんは私にとって一番の親友

学園都市に来たときから苦楽を共にしてきた大切な親友だ。

浜面「そうか…これは半蔵が言ってたことなんだが、今日の武器の売買はどうやら罫である可能性が高いらしい…気をつけた方がいい」

詩歌「ありがとうございます、Hさん」

浜面「Hさんって誰だよ!?!」

そうして、試作品のチヨコを渡すとHさんは仲間を連れてどこかに消え、私は廃ビルへと足を運びました。

145

後日、このことが原因なのか狂乱の魔女という通り名がスキルアウト達に広まり、詩歌はスキルアウトに恐れられるようになる。

S i d e o u t

陽菜 s i d e 廃ビル

先ほどからここに大勢のスキルアウトが集まっている。

どうやら、昨日潰したスキルアウト達の情報は正しいらしい。

陽菜一（しかし、肝心の三船達は一体どこにいるんだ…）

私があたりを見回したとき、向こうから大型のトラックがやってきた。

おそらく、あれが三船がいるだろう。

三船は誰も絶対に信用しない。

そのため、いつも裏切りを防ぐために必ず現場には自身が赴き指示を出している。

陽菜一（やはり、ここに来たか三船…）

私の予想通り三船が車から降りてきて、トラックから武器を運び出す。

陽菜一（三船を確認したところで、他は退場してもらうかね）

私は火の玉を十数個周囲に作りだすと、武器に夢中になっているスキルアウト達の背後から躍り出る。

「誰だ!？」

陽菜「遅い、<鬼火>！」

不意を突き、十数個の火の玉を一斉に飛ばす。

スキルアウト達の目の前に火の玉が直撃し、爆発が起き、その爆風に何十人のスキルアウト達が吹き飛び気絶する。

この火の玉は、私の発火能力で作りだしたもので、爆弾並みの威力がある。

さらに、自在にコントロールができるため使い勝手のいい能力である。

陽菜「まだまだこんなもんじゃないよ！」

そして、あたり一面に炎を発生させ、火の海にする。

「ひい、化け物」

「こんなの聞いてねーぞ」

「もしかして、あれが赤鬼か？」

「だとしたらヤベーよ、俺達瞬殺されてしまう」

「早く武器を回収して、ここから離れようぜ」

陽菜「させるかよ、＜鬼火＞」

さらに、武器が運び出されたところに<鬼火>を発射し木っ端微塵に破壊する。

スキルアウト達はあまりの事態に混乱し、我先にと逃げだしていく。そしてこの場には三船とその部下たちだけになった。

陽菜「見つけたぜえ、三船。鬼塚組に泥を付けたことを後悔しな」

三船「やはり、来たか糞ガキ。オメーが来ることなんざ、予測済みだ」

陽菜「はっ、俺が糞ならテメーは糞以下だな」

三船「けっ、かわいくねえガキだな」

陽菜「とっととけじめをつけさせてもらうぜ、<鬼火>」

キィーーン

火の玉を形成し、三船の目の前に発射しようとした瞬間、いきなり頭にノイズがはしった。

陽菜「くっ…何だ…これ…あ、たまに雑音が生じて…」

ノイズのせいで火の玉は霧散してしまい、やがて、私は立つこともできなくなってしまうた。

三船「だから、言っただろう予測済みだつて。それに今回の出来事もオメーを誘き出す為に起こしたことから、オメーの対策もしてきてるに決まってるだろうが」

三船はリモコンを取り出す。

三船「これはまだ発火能力者にしか効かない試作品だが、キャパシティダウンつつう能力者の演算を妨害する代物だ。本体はでかいから、トラックじゃなきゃ運ぶことができねーし、10分程度しか働かねーが糞ガキには効果抜群だろ」

陽菜「（くそ…能力が制御できない…）」

陽菜「オメーなんざ、能力を使わなくてもこの拳で　　がはっ」

いきなり、陽菜の体が宙に浮き、首回りに圧迫感を感じ、呼吸が苦しくなる。

三船「本家には報告してなかったが、俺は実はLevel3の念動力でな、半径5m以内ならこのようにすることもできるんだぜ」

さらに締め付けが強くなり、手足ですら動かせなくなる。

三船「俺はこの力と学園都市の武器で鬼塚組を支配する。あんな古臭く、カビの生えた組なんざこの先、生き残ることなんかできないしな。弱肉強食、俺のモノにしてやる」

陽菜「親父を…騙しやがって…オメー…は絶対に…許さない」

三船「減らず口を。でも、安心しな、組長の一人娘であるお前を殺すなんてしねーよ。ちゃんと人質として働いてもらっつからなあ」

三船は狂ったように笑い出す。

陽菜「くそっ…わりい、親父…詩歌っち…」

ズガツシャア

陽菜が苦しみながら意識を失いそうになる姿を見て三船が笑みを深めたとき、いきなり周囲に電撃が走り、トラックが爆発させた。

？」「どうやら間に合ったようですね…それと美琴さんから力をコピ

ーしておいて助かりました。コピーしなかつたらキャパシティダウンとやらの破壊は難しかったですしね」

ズドンッ

「「「「「「「「「「「」

さらに、爆発の不意を突き、三船の部下達を一瞬で気絶させる。

三船「誰だ、貴様!!」

詩歌「私、いえ、俺はそこにいる陽菜の親友の上条詩歌だ!! 残念だが、俺は親友を傷つけられて笑えるほど心は広くない。だから、手加減はできない、覚悟しな!!」

意識を失う瞬間に見えたのは、滅多に見れない親友の怒りの表情だった。

S i d e o u t

詩歌 s i d e 廃ビル

こんなにキレたのは久しぶりだ。

最後に私がキレたのは確か陽菜と初めて喧嘩したときだろう。

私と陽菜は出会った頃から気が合っていたわけではない。

むしろ最悪と言ったところだろう。

私は陽菜のいい加減で身勝手なところが気に食わず、陽菜は私が猫を被って、自分を偽るのが気に食わなかったらしい。

そんな私達だから、ルームメイトになったにもかかわらず、会話もせず、お互いがお互いを避けあっていた。

そんな生活が続いたある日、陽菜は私の当麻さんへの思いに気づいてしまった。

根がまじめなのか、陽菜は実の兄を異性として見るなんておかしい、人として狂っていると私を非難し、私の想いを全否定した。

当然、私はその発言に怒りを覚え、訂正させるため陽菜と初めての喧嘩をした。

その頃の私は師匠と出会う前で、体も鍛えていなかったで、幼い頃から柔術、空手、剣術等を習っていた陽菜に全く太刀打ちすることができなかった。

しかし、私は何度も倒されようとボロボロになろうと立ち上がり、陽菜へと向かっていった。

陽菜はそんな私のがむしやらかな特攻に危機感を覚えたらしいが、人としての道を踏み外させないために、そして、相手の本気に答えるために手加減することが一切なかった。

そして、何時間もの攻防の末、私は陽菜に一撃を入れることができた。

そう、私の想いを込めた一撃を

だけど、私はその一撃で満足したのだろうか気を失ってしまい、その後のことは全く覚えていない。

陽菜が言うにはあの後すぐに私を探しに来た当麻さんが現れ、倒れている私を見て、ひと悶着が起きたそうで、そのときの当麻さんの気迫は陽菜さんを怯ませるほどすごいものだったらしい。

そして、その次の日、意識が覚めた私の横に陽菜さんがいた。

陽菜さんは私が起きたのを見るとすぐに土下座をして、謝罪した。

昨日の喧嘩から私の想いは本物であると認め、それを侮辱してしまったことが申し訳ないということらしい。

私はそんな陽菜さんの潔さを認め、謝罪を受け入れた。

それはお互いにとって、学園都市に来て初めての理解者で、自分と同格の存在だと認め合えた瞬間だった。

喧嘩をした相手と友達になるなんてベタなものではあったが、お互

いの気持ちを本気でぶつけ合い、そして認め合ったのだ。

それから、時々ではあるが喧嘩もしたが、その度に仲直りをして互いの絆を深めていき、やがてお互いを親友と呼べるほどの仲にまでなった。

まあ、謝罪した後に、当麻さんのことをいい男発言したときは思わず殺気をぶつけてしまったが…

詩歌一（ふふふ、本当に懐かしいわね…こんな昔のことを思い出すなんて…）

私が昔のことを思い出している隙に三船さんは私を念動力で締め上げた。

三船「何考え事をしてやがんだあ？まさか俺を眼中にないとも思っているのか！？」

詩歌「ああ、そうだ。たった一人の女の子を相手に何人で囲むどころか、罍を用意しているようなクズをどうして恐れる必要があるというんだ？」

挑発にキレたのか絞めつけをさらに強くした。

三船「おいおい、そんなに挑発していいのか？貴様の命は俺の手に握られているみたいなものだぞ。命乞いしなくていいのか？」

詩歌「この程度で俺の命を奪う？はっ、笑えない冗談だね！それにクズなんか俺が命乞いなんて絶対にするわけがないだろう？アンタこそ今すぐ俺に詫びた方がいいぜ。まあ、詫びたとしても、手加減することは一切ないけどな」

三船「そんなにお望みなら殺してやる！！」

三船が俺の息の根を止めようと念動力に力を込めた瞬間、俺は<幻想投影>で三船の念動力に干渉を始め、念動力による拘束を解く。

三船「何！？一体どう」

拘束が解いた瞬間に俺は一瞬で間合いを詰め、勢いを付け三船に飛び掛かり、左手を交差させるように首に引っ掛け、左膝を顎めがけて袈裟切りの逆軌道の如く45度上に切り上げ、相手の死角から放つ。

三船「がッ」

さらに、空中で腰を捻り、後ろ回し蹴りの要領で右足での袈裟蹴り、まさに雷のような一撃を喰らわせる。

ドゴッ！！！！！

身体全体の力に、落下する力を加えた一撃は大人である三船を物凄い勢いで顔面から地面に叩きつけた。

三船「はっ！！？」

そんな一撃をもらった三船は意識を失い、鼻の骨が折れ、多量の鼻血が流れる。

詩歌「あちゃ〜…陽菜、ごめんな、アンタの獲物、俺が狩っちゃまったよ…」

そして、詩歌はアンチスキルに連絡した後、陽菜を連れてこの場を離れた。

その後、現れたアンチスキルにより三船達は逮捕され、三船はしばらく入院を余儀なくされたらしい。

S i d e o u t

陽菜 s i d e 帰り道

陽菜「ん？」

目が覚めると、私はいつのまに第7学区の通学路にいた。

視界も揺れていることから誰かに背負ってもらっているらしい。

詩歌「ようやくお目覚めのようですね、陽菜さん」

聞きなれた親友の優しい声が入る。

陽菜「（やっぱり、あの時助けてくれたのは詩歌だったんだ）」

陽菜「詩歌たち、心配かけてゴメン…それと助けてくれてありがとう…」

詩歌「本当ですよ、全く」

そして、詩歌たちは

私が寮に帰ってこなくなったこと。

無断で授業を休んだこと。

連絡が付かないこと。

私を探すために色々な人に話を聞いたこと。

門限を破ってしまったこと。

当麻つちにチヨコが渡されるのを阻止するための罠を準備できなかったこと。

など、最後のはどうかと思うが延々と私に愚痴を言い続ける。

私も詩歌っちがかなり心配してくれていることがわかっていたので、おとなしく、じっと説教を聞き続ける。

キユウ

しかし、説教の最中、ここ最近、満足に飯を食べていなかったせいか腹の虫が鳴く。

詩歌「ふふふ、説教はこれくらいにしますか。陽菜さん、コンビニでおにぎりでも買ってきますから、このチヨコでも食べていてください」

そういうと詩歌っちは、私をベンチに下ろすとカバンからきれいに包装されたチヨコを渡し、コンビニへと走っていった。

陽菜「はあ、まったく気がきくねえ。もし私が男だったら告白

していたに違いないね)

包装紙を丁寧に開き、箱の中にあるハート形のチョコを取り出す。

チョコの表面になにかが書いてあったようだが暗くてよく見えないし、お腹もすいていたので、大口を開けて一口で食べる。

陽菜「(すっごくおいしい！今まで食べてきたどんなチョコの中でも断トツにおいしい！それになんだか、体の奥底から力が漲ってきた！それに目も覚めてきたみたいだ！流石、詩歌っち、食べたらずくに体力を回復させるチョコを作るなんて…)

詩歌「うちの作ったチョコに感動していると、詩歌っちがコンビニから戻ってきた。

陽菜「詩歌っち、すごいね、こんなチョコ初めて食べたよ！」

詩歌「ふふふ、それはよかったで あれ？」

詩歌「ちは急に立ち止まり、その視線は先ほどの包装紙に向けられている。

詩歌「あの陽菜さん聞きたいことがあるんですが…先ほどのチョコ、何かメッセージが書かれていますでしたか？」

陽菜「えっ？そっいえば、何か書いてあったような「はあ！！？」」

詩歌「ちは何故か驚愕し、私がつんでもないミスをしてしまったかのように責めるような視線を向ける。

詩歌「ひ、陽菜さん、あなた、私が丹精込めて作った当麻さん専用の秘伝のエキスを配合した特製のチョコを食べてしまったというのですか…」

詩歌「ちは両手両膝を地面に置き、まるで世界の終わりのようなオラを醸し出す。

陽菜「あはは、ごめんね、暗くてあまり気にしてなかったよ」

詩歌「ごめで済んだら警察はいりません！！全く、陽菜さんは調子に乗ると肝心なところでうっかりしてしまうんだから。そんなんだから、あんな三下の罠に嵌ってしまつですよ」

その物言いに思わず力チンときた。

陽菜「別に私は助けてなんか言っていないし、あの後すぐに逆転するつもりだったしね。それに元々は詩歌「ちがチョコを渡し間違えたのが原因じゃん」

詩歌「よくも恩人に対してそんなことが言えますね！やはり、調子

に乗っていますね！その天狗の鼻叩き折ってやりましょうか？」

陽菜「そんなに言うなら叩き折ってもらおうじゃないか、微笑みの聖母さん」

詩歌「言っときますけど、私、怪我人でも容赦しませんよ、赤鬼さん」

陽菜「上等だ、ゴラァ！！」

その後、二人は朝になるまで壮絶な死闘を繰り広げ、壁を粉碎し、自動販売機をぶっ飛ばし、樹木を根こそぎなぎ倒すなど、辺り一面をまるで災厄が通り過ぎたような悲惨な状況にしてしまった。

このことが第7学区に瞬く間に広まり、赤鬼と狂乱の魔女という通り名はスキルアウトだけではなく学生にすら恐れさせるほどになり、夜中、外をうろついていると血に飢えた鬼と魔女が現れるという噂が流れ、しばらく深夜に外をうろつく学生が激減した。

もちろん、そのことは寮監の耳にも入り、二人は地獄のようなお仕置きを受けることになってしまった。

ちなみに、詩歌はお仕置きを受けた後、すぐに人間の限界を超えた速度で秘伝のエキスを配合した特製のチョコを作り上げたが、陽菜との壮絶な殴り合いでできた怪我の治療をしていなかったため、そのチョコは血塗れになってしまった。

もちろん、それを渡された当麻は血塗れであることは気づいたものの、大切な妹が作ったものだからと何も言わずに食べ、お礼を言ったそうで、その男気に詩歌はますます当麻に惚れてしまうことになる。

あと、陽菜の代わりに（強制的に）何十個の試作品のチョコを食べた美琴は体重が数kg増えてしまい、しばらくはチョコは見たくもなくなってしまうそうだ。

つづく

幻想御手編 インデックスとの遭遇

幻想御手編 インデックスとの遭遇

当麻 side 鉄橋

不幸だ。

今の状況を一言で表すならそれに尽きる。

今日は詩歌が師匠という人物と組み手をするらしく、夕飯をたまには外で食べるようとファミレスに来たところ、十数人の不良達が一人の女子中学生が絡まれているのを目撃し助けようと思いついて不良達に声をかけてみたところ説得に失敗し追われることになってしまった。

詩歌という自慢の妹を守るために普段から鍛えていたおかげでファミレスから離れ、不良達の半数を怪我をさせることなく気絶させることができた。

しかし、仲間を呼んだのか後からぞろぞろと不良たちがやってきてしまい、これ以上の喧嘩を避けるためにオレは今逃げている最中である。

当麻「追手がなくなった？ やつと撒いたか ツ!？」

ゴウッ

後ろからいきなり攻撃される。

しかしこれは先ほどの不良達の攻撃ではない。

美琴「何やってんのよアンタ。不良を守って善人気取りか、熱血教師ですかあ？」

そう先ほど不良達に絡まれていた女子中学生からの攻撃だ。

その女子中学生は詩歌の妹分でLevel 15、常盤台のエースである。

そう、俺が助けようと思ったのは絡んでいた不良達の方である。

おそらくあのままいけば不良達は間違いなく黒焦げにされてしまっていただろう。

当麻「後ろの連中が追ってこないのは…」

美琴「うん、めんどいから私が焼いといた」

バチッ、と美琴は手に電撃を出す。

当麻「人がせつかく…」

美琴「馬鹿にしないで、私はLevel5なのよ？ 詩歌さんにも注意されてるし穩便に片付けたわよ」

当麻は不良達が黒焦げにならないように穩便に片付けようとしたのだ。

うわぁ、と当麻は溜息をつくのも無理はない。

美琴はそれを気にせず髪をかき上げる。

美琴「まったく、アンタのせいで情報取り逃がしちゃったじゃない」

当麻「情報？」

美琴「才能の不足をズルして補う裏技の噂があつてねー」

当麻「何だそりゃ」

美琴「頭の開発をカリキュラムに組み込んでいる学園都市には『神様の頭脳』の副産物がたくさんあるのよ。例えば、私のDNAマツ

プを元に開発された軍用クローン、通称<妹達>がどこかの研究室で製造されてるとかね」

当麻「はあ、よくわかんねーけどお前も大変なんだな」

当麻はじゃあ、と帰ろうとしたが美琴の電撃に阻まれてしまう。

美琴「まったく、私の電撃を無力化するような力を持ちながら不良相手に逃げたりして、強者の余裕ってヤツかしら？」

当麻「だからオレはLevel10で」

美琴「うそつけっ」

ズドンッ

美琴は当麻のいうことを遮り電撃を放つ。

美琴「何がLevel10よ。電撃の槍も砂鉄の剣も効かない。レールガンも打ち消しといて。そんな二三〇万分の一の天災が何を言ってるのよっ!!」

美琴は当麻に何度も電撃の槍を放つが右手に全て打ち消されてしま
う。

当麻「…何て言うか、不幸っつーか…ついてねーよな」

当麻「（死ぬ！ホントに死ぬ！ホントに死ぬかと思った！キヤーン
！！）」

当麻は内心を悟らせないように顔を引きつらせながらも余裕綽々の
態度を取り繕う。

美琴の電撃は確かに恐ろしいが、詩歌の制裁のほうがもつと恐ろし
いので、どうにか表情から内心を悟られることがないようにするこ
とができた。

美琴「何ですって？」

当麻「いくらやってもお前の攻撃は俺には効かないんだ。これ以上
続けても不毛なだけじゃねーか。だから…こんな無意味なことはや
めてもつと若者らしく青春を謳歌しないか？」

確かに、美琴の攻撃はすべて<イマジンプレイカー>で防がれてし
まうので、当麻の意見は尤もである。

美琴「らしく……………そうね、私が間違ってたのかもしれないわ

ね

当麻「わかってくれたか」

当麻「（やれやれ、これでようやく帰れるか）」

しかし、当麻の願いもむなしく…

美琴「ええ。詩歌さんに言われてずっと心のどこかにブレーキをかけてたのかもね…」

空に雷雲が現れる。

美琴「私の全てを出し切った全身全霊の攻撃…」

当麻「雷…雲？」

当麻は空を見て茫然とする。

美琴「人間相手にさすがにこれは…とか躊躇するなんて本っ当！！私らしくなかったわ」

当麻「いや、そうじゃなくて…つつかそんなもんブチかましたら周辺の電気機器が…」

振り切れたのか美琴は当麻に自身の最大の電圧の雷を当麻の頭上に発生させた。

ドオオオン！！！！！！

当麻「不幸だあー！！」

その後、第七学区周辺に大規模な停電が起きた。

S i d e o u t

詩歌 s i d e とある男子寮

今日から夏休み。

だけど当麻さんは補習があるらしく夏休みを学校に行かなくてはなりません。

それは大変だろうから私は当麻さんの世話をするつもりです。

本当に世話がかかりますね。

あんなにテスト勉強に付き合っただけなのに…まあ、わざとテストとは全く関係ない人の記憶について教えていましたか…

決して夏休みの間も朝から当麻さんの部屋に行きたいからではないですよ。

とにかく、私は夏休みも朝早く当麻さんの部屋に行かなくてはなりません。

しかし、昨日の夜に起きた大規模な停電により目覚まし時計が壊れてしまいました。

なので今日はいつもよりも起きたのが遅くなってしまい、一刻も早く当麻さんに会うために急いで身支度を整えて全速力で当麻さんの部屋に向かっています。

詩歌（早く当麻さんの部屋に行って朝食の準備をしなくちゃ）

エレベーターにも乗らず階段で一気に当麻さんがいる八階まで駆け上がります。

そうして当麻さんの部屋に合鍵で開けて中に入ると…

中には素っ裸な長い銀髪の幼い女の子と…

その子の隣で私を見て固まっている当麻さんがいました。

ゴゴゴゴゴゴ……

詩歌「あらあら、当麻さんは女の子を部屋に連れ込み素っ裸にしてしまっ鬼畜なのかしら。しかも、こんなに幼い子を…当麻さんは口リコンでしたのね…知りませんでした、当麻さんは大人女性が好きだと思っていたんですね…フッフ、だから私に欲情しなかったんですね…」

詩歌からとてつもなく真っ黒でドロドロしたモノが溢れてくる。

当麻「い、いや、違うんだ、誤解だ、詩歌。と、とにかく落ち着け、先ほどから何言ってるのかが良く分からない」

当麻の説得もむなしく詩歌はまわりに黒いオーラを經ち込めながら歩いてくる。

ドシンッ ドシンッ

その一歩一歩ごとに寮全体が揺れる。

表情は陰ってしまい窺い知ることができない。

詩歌「せつかく、父さんを反面教師にして今まで調教してきたのに……」

詩歌は何かを呟きながら二人の所にやってくる。

?「ひいつ!!!?!?」

そのあまりの恐さに女の子は全裸であることを忘れ隣にいる当麻に抱きついた。

当麻「ちょ、おま!?!?」

少女の体が密着したことで思わず当麻の顔が赤くなる。

それを見た瞬間、詩歌のナニ力が弾けた。

詩歌「qwens当麻jdccjnm去勢apomすeu」

最早人語を用いたコミュニケーションが不可能な詩歌を目の前にして、これ以上の交渉は無理であるということ当麻は悟り、辞世の句を残した。

当麻「不幸だ…」

バーサーカーと化した詩歌が当麻の部屋に真つ赤な花を咲かせた。

後日、それを見た少女は語る。

？『どうやったら人の身体があんなになるのかな…今まで必要悪の教会で見たどの拷問よりも悲惨だったんだよ。ホント…当麻よく生きてだったんだよ』

S i d e o u t

詩歌 s i d e 当麻の部屋

あれから私はグシャグシャに潰れたモノを部屋の隅に置き、少女から事情を聴くことにしました。

たぶん当麻さんのことだから何かに巻き込まただけだと思いますけどね。

だけど、少女は『刺客がやってきた』や『一〇万三〇〇〇冊の魔導書は渡さないんだよ』と喚いて私になかなか近づこうとしません。

捕まえて尋問しようかと考えたとき、キュル、と少女のお腹が鳴りまいた。

そこで私がご飯を作ってあげるとすぐに食いつき、

床に落ちている服も直してあげるとあっさりと懐柔してしまった。

こんなんでよかったのだろうか？

詩歌「ねえ、インデックスさんは何で当麻さんの部屋にいたの？」

イン「落ちたんだよ。ホントは屋上から屋上へ飛び移るつもりだったんだけど……これはとうまにも言ったけど私魔術結社に追われているの……とうまの右手でく歩く教会で粉碎されてしまったことは探査術式ですでに敵に知られているんだよ……だからもうすぐここに魔術師がやってくる……でも大丈夫私はすぐにここから出て行くからね。ねえ詩歌、教会がどこにあるかって知らない」

詩歌はインデックスが説明している間、なにも言葉を発することができなかった。

詩歌が言葉を発したのは最後の質問の答えくらいだ。

インデックスの雰囲気から嘘は言ってないことは分かる。

けど詩歌にはそれが本当かどうかの判断をすることができない。

それもそのはず詩歌はまったく魔術について知らない。

それにここは学園都市、その技術は少女の記憶を弄くり、本当のことだと思ひ込まされたことも可能である。

詩歌が混乱しているうちにインデックスは既に玄関にいた。

イン「詩歌、ご飯おいしかったんだよ」

行かせてはいけない、詩歌はそう感じた。

しかし、インデックスが一人で行ってしまふ。

もし、先ほどのことが本当だったら恐ろしい追手がいる。

彼女はきつと襲われてしまふだろう。

しかし、詩歌はついさっき会ったばかりの相手のために本当かどうかかわからないことに命を懸けることができるほどの覚悟はない。

だから、詩歌にはインデックスに声を掛けることができなかつた。

それを察したインデックスは振り向かずドアを開け、出て行こうとする。

だが

当麻「おい！…何か困ったことがあったら、また来ても良いからな」

いつのまに詩歌の隣に当麻が立っていた。

何も言えず立ち竦んでいた詩歌の代わりに力になると宣言する。

詩歌「（当麻さん…たとえどんな理由があろうとも決して他人の不幸が見過ごせない…私みたいに躊躇することなく…隣にいるだけで私に勇気をくれる愛しい人…／＼／＼）」

勇気をもたらった私はインデックスさんに声を掛けた。

詩歌「そうですよ、インデックスさん。私たちが力になりますからね」

止めることはできなかったが力になると声を掛けることができた。

イン「うん。お腹が減ったら、また来る。ありがと、とうま、しいか」

そしてインデックスは去って行った。

当麻「なあ、詩歌…本当に魔術ってあると思うか…」

詩歌「わかりません…でも外部で学園都市と同じように超能力を魔術と教えている施設があるとしたら…もしかしたらインデックスさんはそこから脱走してきたのかもしれない…」

当麻「そうか…」

当麻さんはおそらくその子の力になってあげようとするでしょう。

私もそれに協力しようとしたとき急に携帯が鳴り美琴さんから至急病院に来てくれと頼まれました。

当麻「詩歌はそっちに行つてやれ。インデックスのことなら俺に任せろ。俺が絶対インデックスを救つてやるから」

詩歌「で、でも」

しかし、私はインデックスさんのことはもちろん、何よりも大切な当麻さんのことが心配でなかなか決断することができません。

そんな私の内心を悟つたのか当麻さんは頭を撫でながら優しく語りかけます。

当麻「大丈夫だ、詩歌、俺が絶対にインデックスを助ける。お兄ちゃんを信じる。お兄ちゃんが今まで詩歌との約束を破った事がないだろ。だから詩歌は後輩を助けてやれ。俺の自慢の妹なら絶対に助けてやれることができるはずだ」

詩歌一（そんなこと言われたら当麻さんのこと信じなきゃいけないじゃないですか…まったく…）

当麻さんは私との約束をどんな些細なことでも、どんな不幸があるうとも守ってくれます。

詩歌「じゃあ、二つだけ約束してください…今日、絶対にインデックスさんと無事に帰ってくる…何かあったらすぐに私に連絡をしてくれること…この二つです。わかりましたね、当麻さん、絶対ですよ」

しかしこの約束は守られませんでした。

当麻「ああ、わかったよ、詩歌」

なぜなら私は当麻さんが自身の荒事に私がどんなに強くても絶対に巻き込みさせません。

そのことを失念した私は一生後悔することになります。

それに気づいていればあんなことにならなかったかもしれないの…

そしてこれが…前の当麻さんとの最後の会話でした。

つづく

幻想御手編 インデックスとの遭遇（後書き）

感想・ご指摘お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4663z/>

とある賢妹愚兄の物語

2011年12月16日01時45分発行